

初期イスラームの女性神秘家たち

メソポタミアの禁欲神秘主義からホラーサーン派神秘主義まで

ザフラー・ターヘリー／前田君江訳

私は生涯において、唯一人の男と一人の女以外の者を見なかった。その女とは、ファアテメリイェ・ネイシャブリーであった。彼女が体験していない、神秘道のいかなる階梯もないことを私は知った。

—— パーヤズイード・バスターミー¹

はじめに

イスラームにおける女性の人格と権利の問題は、ここ数十年においてイスラームの歴史や文化の研究者たちの関心を惹きつけ、最も多く議論されてきたテーマのひとつである。イスラームにおける女性の地位に関する一般的な認識——それは、聖典クルアーンの法に定められた、女性の地位と役割に対する無知の証であるのだが——西欧において次のような一般論を生じさせた。すなわち、ムスリム女性は、長い歴史の中で、イスラーム法によって虐げられてきたのであり、学問と文化の領域において、いかなる役割ももたなかったのだという誤った見解である。ここ数十年に行われた極めて広範な研究は、クルアーンに立脚した女性の権利の問題を論じてきた。それによれば、イスラームは（人類の）創造と信仰、報いと罰、そして、人間の基本的な権利の多くの領域において、男女平等の原理に基づいた女性の権利と地位

を、それ以前に発生した諸宗教よりも高めたのである。²

しかし、イスラーム社会に限らず、人間社会の歴史は男性優位の非常に長い時期を経てきた。その間、権力とペンとが、当然、男性の手において、——他の多くの宗教の教義におけるのと同様に——女性に関わる多くの領域において本来の姿から逸脱し、とくに女性に対して社会的存在であることを禁じ、女を従順なものとしておくために多くの倫理的な法を定めてきた。³そして、それらの法に正当性を与えるため、ときにハディース「預言者の言行についての伝承集」とスナ「預言者の言動に基づく慣行と範例」に論拠を求めたのである（なお、「」内は、訳者による解説を示している）。

法学者（アリーム）やムジュタヒド「イスラーム法の解釈行為（イジュティハード）の資格を有する学者」、ハディース学者、スーフイー、クルアーン注釈者の中にも女性たちがいたことは、イスラーム文化の歴史全体において明らかである。イスラーム文化の形成と伝播において様々な役割を担った絶対多数の男性に対し、女性の数が極めて限られているとしても、重要なのは彼女たちが存在していたという事実である。歴史上、こうした女たちの名と評伝が記される際には、否応なしに執筆者である男性たちの見解と意向に基づくものとなっており、伝

記の執筆者は、女性については記述しないのが通例であった。この点を踏まえるならば、一部の伝記集成執筆者、スーフイー、歴史家らによる書の中で女性に関する記述が見られるということは、その時代の社会において、女たちが記述対象とされるべき位置づけにあったことを示しており、さらに、彼女らの存在が無視できないものであったことを示唆している。現存する史料のうち、女性たちの小伝を独立した形で議論の対象としているものはごく僅かである。しかし、多くの史料に女たちについての記述が散見されることは、そのこと自体、彼女らの社会的地位を一定程度示していると言えるだろう。

イスラーム初期の三世紀に「アービド」「敬虔主義者、イバーダを行う者。とくに、イバーダを重視し、過度なまでに実践する者を指す。イバーダとは、通常、個々の信者が負う礼拝や断食、喜捨などの宗教的義務を指す」や法学者、スーフイーであった女たちの評伝に関しては、アブー・アブドゥッラフマーン・スラミー(936没)が、ホラーサーンとメソポタミアの八十人の女性の生涯と彼女らの言葉を、『女性神秘主義敬虔家たちの記述』(以下、『女性神秘主義敬虔家たち』と略す)⁴において記している。本稿の執筆には、主に同文献を使用した。これによれば、イスラーム初期の二世紀「西暦七世紀、八世紀、九世紀初頭」には、メソポタミアの禁欲主義神秘家 *zāhid-sūfī* の中にも多くの女性がいた。また、三世紀「西暦九世紀中期〜十世紀初頭」には、ホラーサーンが女性スーフイーの中心地となり、彼女たちは自らの神秘体験を自ら語り、また、フトウワワ(「自我否定の精神」*futuwwa*、原義は「若者らしら、男気」、(第一期、¹)も参照)や「スイドウグ」(真実を語ること)について指導していたという。

スラミーは、『女性神秘主義敬虔家たち』を、女性スーフイーのみの伝記を取めた単独の書として記したのであり、決して、『スーフイーの階層的分類』の一部として著したのではない。また、ジャーミーは、『神聖なるお方の親交の息吹』(以下、『親交の息吹』と略す)の執筆に際し、『女性神秘主義敬虔家たち』に依拠しており、『親交の息吹』の最後の一章を、女性スーフイーの記述にあてている。この中で、「(スラミーが)アービドの女たちと霊知者(アールフ)の女たちについて、『スーフイーの階層的分類』とは「別に書を集めた」⁵と記しているのである。注目すべきは、たとえば、スラミーが「スーフイーの階層的分類」において記述した男性スーフイーらの数に対して、女性スーフイーの数も僅かであったとしても、ヘジュラ暦四世紀の末「西暦十世紀末〜十一世紀初め」に女性スーフイーのみを取めた列伝を著したということとは、女たちがこの領域において取り上げるべき存在であったことを示している。また、イブン・ジャウズイー(1200/1没)「バグダード生まれの法学者、説教師。三百冊以上に及ぶ書を著す」は、『純粹の資質』において、イスラーム初期の多くの女性アービドとスーフイーについての伝記を記しており、やはり先行文献としてスラミーの書を用いていた。さらに、他の神秘主義文献でも、男たちの生涯に関する記述の間に見られる女性スーフイーの記録から、彼女たちの名や生涯を窺い知ることができる。この中には、四世紀「西暦十一世紀」のシーラーズで、当時の慣習に反して、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ビン・ハフイーフ(本稿4参照)の修道所の門戸を女たちにも開いた、彼の母オンメ・モハンマド(本稿4参照)や、フサイン・ビン・マンズール・ハッラージ(922没)「ファールスのバイザー生まれ。「我は神なり」等の酔

言で知られる神秘家。不信仰者宣言(タクフィール)を受けたのち処刑の姉妹、そして、小伝すら残されてはいないが、自らの神秘体験を語った多くの無名の女たちがいた。

イスラーム中期には、エスファハーンやホラーサーン、ハマダーン、タバリスターン、サジェスターンにおいて、女性のムジュタヒドや、ハディースの伝承者が存在しており、その数は、サムアーニーが(11667没)が、自著の一章を彼女たちの記述にあてるまでにのぼっている。サムアーニーは、ホラーサーンとエスファハーンで彼自身がハディースの教えを受け、また、ハディース伝達の許しを得た六十人の女性の名を挙げ、彼女らの生涯について簡略な伝記を記している。⁶ また、歴史記述においても、ハティーブ・バグダーディー(10271)「説教師ハディース学者の伝記『バクダドの歴史』で知られる」や、アブドゥル・ガーフィル・ファールスィー(11345没)「ニーシャールブル生まれ。同地の歴史を著した」や、ハムゼ・サフミー(1079没)のような歴史家たちが、バグダドやニーシャールブル、ゴルガン、エスファハーンの女性ハディース学者や法学者、スーフイーについて記しており、これらは、イスラーム諸学における女性の存在を一定程度示すものとなっている。

一 イスラーム神秘主義

「タサツウフ」(イスラーム神秘主義)は、イスラームの精神文化と呼ばれている。すなわち「我執の消滅」*tazkiye-ye nafs*と「内面の浄化」*safa-ye baten*、神秘道における「求道」*seyr-o-sulik*、存在の真理を識る

過程での神秘的開示(カシュフ)と(直感的)認識(シュフード)を教義とする思想的潮流である。神秘主義は、イスラーム期の最初の二期において、禁欲主義(ズフド)と(人間の神に対する)「奴隷性」(ウブーディーヤ)に基づくものとして創始され、ヒジュラ暦三世紀、四世紀「西暦九〜十世紀」には、神への愛(マハッバ)と我執の消滅、自己の浄化を強く打ち出し、教義として、靈知(マアリア)「普通の知識であるとイルムに対し、自ら体験によって知る直観的知識」を標榜した。そして、人間は神の魂が吹き込まれ、神の形を真似て創造されたのである「クルアーン三三、七―九に基づく」と信じることによつて、また、人間を地上における神の代理人とみなし、「己を識る者は彼の主「神」を識る」と述べるハディースを論拠として、より人間主義的な教義へと変貌を遂げ、人間を神の神秘を映す鏡とみなしたのである。神秘主義は、長い歴史の間に、様々な思想的潮流や文化⁷、そして、イラン―イスラーム文学や芸術、倫理、教育と結びつき、人間と神との関係に対する至高なる視点ゆえに、イスラーム文化に独特の深みを与えてきた。

歴史的に様々な思想が「タサツウフ」の教義と混交したとしても、それがイスラーム自体に起源をもつことに関しては、全く疑いはない。ここ数世紀において、多くの研究が、イスラーム神秘主義の起源について論じてきた。それらの中には、イスラーム神秘主義の教義の起源をイスラーム以前のイランの宗教的教義、すなわち、ミトラス教やゾロアスター教に求めるものもあれば、ヒンズー教やユダヤ教、仏教や、キリスト教的隠遁、ギリシャ哲学、新プラトン主義を教義の基礎、あるいは、発生の起源とみなすものもある。しかし、明らかであるのは、

イスラーム神秘主義がいかにイスラーム以外の宗教教義や思想に影響を受けていようとも、その根本はクルアーンとハディースにあるという点である。⁸

イスラーム神秘主義が、歴史上、驚くべき変化を遂げてきた様々な思想的潮流の集積であることを考慮するならば、その全ての潮流を包含する包括的な定義を提示することは容易ではない。神秘主義創始後の最初の三、四世紀、すなわち、イスラームの初めの三、四世紀においては、極めて多様な神秘主義思想が存在しており、それらを定義し総体的に説明するのは困難である。マクダシーは、スーフィー諸派について記した書の中で、次のように述べている。「概して彼らは、すでに知られているいかなる学派や思想にも関わりをもたない。なぜなら、彼らは心象やイメージを信奉しているのであり、ひとつの心象から他の心象へと進んでいくからである。」⁹ これらの心象やイメージは、次第に、いくつもの小さな流れと合流し、神秘主義の教義という大きな河を生じさせた。神秘道の教義は、アッタールの言うように、

「実践と心眼の境地によるものであり、暗誦の学と口角泡を飛ばす形式拘泥主義者の議論の成果ではない。それは、直観的明証によるものであり、言葉による表現によるものではない。秘教的神秘によるものであって、因習によるものではなく、神的靈感によるものであって、後天的に獲得される知によるものではない。」¹⁰ (アッタール、ファアリード・ウッディーン・ムハンマド / 藤井守男訳・解説『イスラーム神秘主義聖者列伝』国書刊行会、一九九八、一三頁。以下、藤井訳『聖者列伝』と記す。)

神秘主義の歴史において、多くのスーフィーや霊知者(アーリフ)にとつての問題が、自らの神秘体験を語るに足る言葉を知らなかった点にあるように、神秘主義の概念をひとつの言葉や定義に当てはめることは、容易ではない。禁欲的スーフィーが俗世から隠遁し、苦行(リヤーダ)や過度のイバードに終始していた初期神秘主義の定義と、自己の浄化と己を識ることを真理に至る道であるとした後期神秘主義の教義は全く異なるものである。イスラームの最初の数世紀において、禁欲主義的スーフィーたちと神との関係は、畏怖と絶対的信頼(タワックル)によるものであった。これに対し、後期には、愛(マハッバ)と「識ること」が、人間と神との関係の根幹となり、ついに、スーフィーの教義が、「己を識る者は、彼の主(神)を識る」というハディースを論拠として、自己を識ることは、すなわち存在の真理(神)を識ることであると捉えられるに至る。

また、「タサツウフ」*tasawwuf* (神秘主義) という語彙についても、見解の相違が見られる。*sifa* 「性質、属性」の意¹¹や、*safa* 「純潔」の意¹²から派生した語であるとか、*falsafa* 「哲学」などと語源を同じくするとの説さえある。しかし、もつとも広く受け容れられている説は、「タサツウフ」の語が「羊毛」から派生し、「羊毛の服を着ていること」を意味するといふものである。これは、初期のスーフィーらが、羊毛で織った粗衣を着用していたことによるものであった。その後、「タサツウフ」の語は、次第に、現世での悦楽よりも禁欲や苦行、自己の浄化や己を識ることに価値を求める「羊毛の粗衣をまとった者たち」の思想的潮流に対し、用いられるようになる。

神秘主義の歴史は、ヒジュラ暦一世紀後半「西暦七世紀後半〜八世紀初頭」に、禁欲主義（ズフド）の思想によって始まった。禁欲主義者（ザーヒド）は、人々から離れて隠棲し、極端なイバーダを行った。この禁欲主義と敬虔さ *virtue* への志向は、イバーダの実行に対する来世での報いという信仰に加えて、イスラーム草創期の簡素さや平等の原理を踏みにじっていたカリフ制の実情に対する反発でもあった。ウマイヤ朝カリフ達の華美を好む性癖や、権力の座に就いたアラブ人らの行動は、新たにムスリムとなった支配下の民族とともに、敬虔さと禁欲を預言者のスンナとみなす人々に反感を呼び起こした。ザッリンクーブ「イランの文学研究者」は、イスラームにおける禁欲思想の登場は、キリスト教的隠遁や清貧といった思想の影響ではなく、当時のイスラーム社会の状況に根源があったとする説を踏まえ、次のように述べている。

「禁欲と隠遁を好む傾向は、とくに、ウマイヤ朝の基礎であるカリフ制度をおおよそ一種のスルタン制に変容させた（正統カリフ以後の時代）において、一部の人々の間で力をもち、ついには、一種の禁欲運動となるに至った。それは、あたかも、クルアーンとシャリーア「イスラーム法」をおろそかにしている一部のムスリムらの浪費や贅沢に溺れた振る舞いに対する反発であるかのようにであった。」¹¹

イスラーム神秘主義を創始したスーフィーらは、苦行や禁欲、イバーダに特別な価値を認め、シャリーアに定められた以上の拘束を自らの手足に枷していた。法学者が解釈するシャリーアの枠を、さらに厳格なものとしたのである。実際、イスラーム最初の二世紀を含む神秘主義の初期において、スーフィーらは、過度の礼拝や断食、苦行や空腹、さらに、物質的な快楽から遠ざかることによって、神との関係を築く

ことができると考えていた。これらのスーフィーによる極端なイバーダや禁欲的行為の数々、神に対する極度の畏れなどが、聖者伝や神秘主義文献に記されている。例えば、ハサン・バスリー（728没）「ウマイヤ朝の高名な禁欲主義者」は、神を畏れるがゆえ、屋上に敷いた礼拝用敷物の上であまりに号泣したがために、彼の涙は雨どいからもあふれ、通りにまで流れてきたという。彼が笑うところを誰も見たことがなかった。¹² バスリーは、地獄の業火を怖れて号泣することをイバーダのひとつに挙げていた。

初期のスーフィーたちが、シャリーアの規定をはるかに越えた禁欲やイバーダを行っていたとしても、彼らに関して残されている伝承のなかで留意すべきは、イバーダと実践（アマル）を強調する一方で、「愛」（マハツバ）と「心」（デイル）に大きな価値を認めており、現世での罰を心の死にあるとみなしていた点である。¹³ そして、このことは、後の時代の神秘主義の変遷において重要な役割を果たした。

神秘主義が確立した初期の時代から、女性スーフィーの存在を示す記述が残されている。彼女らについての小伝や、神秘道導師が女性スーフィーの言葉を引用していることなどから、こうした女たちの様子を窺い知ることができる。神秘主義の歴史の第二期において、神秘主義の教義の根幹は、神への愛と位置づけられる至った。そして、この変遷の基礎を築いた者たちのひとり——一部の研究者によれば、主たる創始者——は、女性であった。

二 神秘主義と女性

神秘主義に関する諸文献を概観するならば、神秘主義とは男性の教派だと言えるだろう。何千人という男性スーフイーの数に対し、女性スーフイーは、ごく僅かである。スーフイーの慣習的作法の記述においても、女性スーフイーに関する言及はほとんどなく、神秘道への入道の作法に始まり、修行所（ハーンカー）での修行とその運営に至るまで、すべて、男性の世界において行われていた。スーフイーらは、神秘主義が、性や名や人種の違いによる壁を越えたところにあるものであると主張し、神への畏怖や内面浄化に基づく神秘修行に邁進しながら、神秘主義の基礎が、自己の本質、そして、自己と神との関係のうえにのみ築かれるものであると主張していた。しかし、神秘主義の文献において、女が男性の求道の障害になるものとして言及されていることから、女たちにとって、神秘主義の世界に入ることが容易ではなかったことが分かる。

女性は、神秘主義の修行の過程において、自身の性を排除しなければならなかった。ある人間の性質の大部分を占めるものを手放すことは、至極困難であるため、その者の存在は切り捨てられるよりほかなかったのである。大半の偉大なスーフイーは、アツタールの言葉を借りるなら、次のように考えていた。

「真理に照らしてみれば、神の徒と言われる人びとは、唯一性の中に無と帰した人たちのことであり、唯一なる神においては、我と汝の個々の存在が消滅するのであるから、まして、男と女という存在自体がどうしてあり続けようか」（藤井訳『聖者列伝』五二頁）

しかし、アツタールできえ、ラービアのような偉大な女性スーフイーに関する記述を引き合いに出し、「彼女こそは…世の人々にとっての確たる証であった。（藤井訳『聖者列伝』五二頁）」と述べる際に、なぜ女の名を聖者列伝に記述するのかと彼に尋ねるであろう者たちを想定している。彼は、ラービアについての記述の最初に次のように記している。彼は、その者たちにこう答えようとしていたのだ。

「『誠にアツラーはあなた方の外見の姿にはとらわれない』『ハディース』と。姿形ではなく、その意図するところによって善は実現する」（藤井訳五一頁）

彼の考えの確たる論拠とは以下のようなようであった。

「女が至高なる神の道にあつて一人の神の人である時、彼女を女とすることはできぬ。…ラービアのことは男性に並べて述べることできるはずだ」（藤井訳藤井訳『聖者列伝』五一—二頁）¹⁴

また、バーヤズイード・バスターミー（874/5没）「バスタームに生まれた、イラン最大のスーフイー、神秘道導師」についても、次のような伝承がある。彼は、こう述べたという。

「女の姿をした男（の能力を備えし者）を見たい者は、ファアテメ（原著者注…オンメ・アリー）（後述、²(1)参照）を見るがいい。」¹⁵

神秘道の階梯を進んでいく「旅人」(サーリク)が、修道の過程において、性や人種、名や名声から己を解放せねばならぬとしても、弱き性としての女に対する神秘主義の視点は、女性を対等の存在として見ることができるといふこと以上に根深いものであった。神への愛に身を捧げ、「(名のある) 男たちに受け容れられし者」*maqbul al-rijal* であるラービアのような人物にさえ、女であるが故に、「弱き者」「女」*za'ife*と語りかけるのである。

イブラーヒーム・アドハム(728/9-77)「禁欲主義者。バルフの王族の出とも言われる」が巡礼のためメッカへ辿り着いたとき、カアバ神殿が見あたらなかった。彼が嘆くと、天界から声がした。

『カアバは、こちらに向かつて来る一人の女』(*za'ife*)を出迎えに行つてないのだ』(藤井訳『聖者列伝』五八頁、下線部は前田が加えた)

そして、ついに、ラービアが自らの神秘体験において、「男(スーフィー)たちの王」(*al-malik*)の地位に到ったときでさえ、彼らは、彼女を「女ならぬ、男」(16)と呼んだのである。また、『神秘主義聖者列伝』には、次のような記述もある。

「サーリフ・ムッリー(788/9没)は、神の館の扉を叩くならその扉はすぐさま開くであろうと言った。ある時、ラービアが彼の説教の座に参席し、言つた。『何故、その扉が閉じており、開くであろうなどと言うのですか。その扉は決して閉じていることなどなく、再

び開くなどというのではないのです。』サーリフは、言つた。『驚くべきことよ、無知な男、そして、賢き弱き女』(*Za'ni za'if o danat*)。』¹⁷

また、〈女性〉性は、スーフィーがそれから護られなければならない危険なものであるとされた。カラーバーズイー「ホラーサーンのスーフィー。「結び」参照」やフジュウイーリー(1009/10-1072or76)「ガズナ出身の神秘家」は、最も古い神秘主義文献のひとつとされる『隠されたものの開示』の中で、女を、人類創造から今日に至るまで、宗教や男の世界をかき乱すものと捉えていた。¹⁸ また、他の多くのスーフィーの言葉においても、これに類した表現が散見される。フジュウイーリーなどのスーフィーは、自著の中で、——ラービア以外の——女性スーフィーの名は挙げていない。彼らは、女の知性と宗教における欠陥を、彼女の精神的上昇の道を妨げるものとみなしていたからである。また、通常、ラービアも、実在の人物としてではなく、むしろ伝説上の人物として語られる。ズン・ヌーン・ミスリー(859or1861没)「エジプトに生まれた高名なスーフィー」は、女性から何かを受け取ることを屈辱であり恥辱あるとみなしていた。アブー・ハフス・ネイシャールーリー(893頃没)「ニーシャールブルの神秘道導師」は、女たちについての伝承を、(イスラーム法の観点から)望ましくないと考えていた。¹⁹ また、バーヤズィードのものときれる次のような言葉が残されている。

「私は神に願つた。私の目には、女たちを、壁に変えてくださいますように、そして、私の目には(壁と女たちが)同じものとなります

ように。」²⁰

同様の言葉は、アブー・エスハーク・カーゼルーニー (1137/8没) にも見られる。しかし、これらのスーフイーたちは、自らと同時代の敬虔主義者や霊知者の女たちと接することによって、こうした考えを改めている。アブー・ハフスは、オンメ・アリーとの邂逅の後、また、ズン・ヌーンは、ファアテメ・イエ・ネイシャ・ブリーと出会ったのち、女性の地位と性質に対する彼らの見解を変えたのである。この点において、バーヤズィードの人生は極めて興味深く、議論に値する。

■ 第一期 禁欲主義的神秘主義の時代

イスラーム最初の一世紀末、ハサン・バスリーとソフィヤーン・サウリー (778没) 「高名な法学者」と同時代には、神に近づくために禁欲行を行った最初の女性たちについての記述が見られる。彼女らは、クルアーンの解釈とハディース伝承の引用に精通しており、神を畏れて号泣することと苦行とに大いなる価値を認めていた。過度にイバードを行い、神を畏れ、最後の審判の日に下される罰を怖れることが、この時代の禁欲主義者たちに最も顕著な特徴である。この時代にバスラに暮らし、イスラームに帰依した第二世代にあたる「アービド」や禁欲主義者として、モアーゼ・イエ・アダヴィー・イエ、シャバケ・イエ・バスリー・イエ、そして、ハフセ・イエ・スィー・リー・ンなどの名を挙げることができる。

モアーゼ・イエ・アダヴィー・イエ *Mu'adhha bint 'Abd alh al-'Adawīya* は、ヒジュラ暦一世紀の後半「西暦七世紀末〜八世紀初頭」の人物であり、イブン・ジャウズイーによれば、ハサン・バスリーが彼女について伝えている。神への「近接」(タカツルブ)のために彼女が取っていた方法は、イバードと泣くこと、そして、睡眠欲を制することであった。スラミーは、彼女の朋友のうち、オナイセ・イエ・ペンテ・アムル *Unaysa bint 'Amr (Dhikr al-Niswal, p.74)* について、また、彼女の弟子のうち、オンメ・アスヴァデ・アダヴィー・イエ *Umm al-'Aswad bint Zayd al-'Adawīya (Dhikr al-Niswal, p.75)* について記している。²¹

また、シャバケ・イエ・バスリー・イエ *Shabaka al-Basriya* には、弟子たちがおり、彼女の家の地下室で、彼らに苦行や口との闘い(ムジャーハダ)、そして、神秘道の実践(アマル)の方法を教えていた。²²

ハフセ・イエ・スィー・リー・ン *Hafsa bint Sirin, ukht Muhammad b. Sirin* は、バスラに住み、「神の本質の顕現と奇蹟を備えし者」*ṣāhibat āyāt wa karāmāt* にして、クルアーンの読誦と解釈において高い権威をもっていた。彼女の兄弟であるムハンマド・ビン・スィー・リー・ン (728/9没) は、クルアーンの説誦に関して難解な問題につきあたると、明快な回答を得るために質問者をハフセのもとに送ったという逸話がある。また、ハシャーム・ビン・ヘッサーンは次のように言ったと記されている。「私はハサン「バスリー」とイブン・スィー・リー・ンに会った。しかし、彼らのいずれも、ハフセ以上には叡智ある者ではなかった。」²³

イスラーム的禁欲主義の時代と呼びうるこの時期の女たちのうち、多くは、「イバードに邁進する者」*mutarabid*、説教師(ワイイズ)、ハディースの伝達者として記されている。また、彼女たちの中には、「バ

スラの」オバイデ・ベンテ・アリー・ケラーブ Ubayda bint Abi Kriab
のように、イジュティイハードや卓越した説教において、同時代に唯一
無二の女性とされた者たちもいた。オバイデの死後、「彼女以上に博識
ある者はバスラにはいなかった」と言われた。また、アブドッラー・
ビン・ラシード・ウツサアデイーは、次のように言ったと伝えられる。「イ
バードに邁進する多くの老若男女に会った。しかし、オベイド以上に
叡智ある女、あるいは、男を見たことがない。」²⁴

また、この時代には、モアーゼーイエ・アダヴィイーエと同時期で、
彼女とも深交があつた、「バスラの」ゴフエイレイエ・アーベデ
Chufayra al-'Abida がある。彼女は、至高なる神から隠されていること、
そして、導師の教えにおいて盲目でいることは、目が見えないこと以
上の辛苦であると考えていた。彼女は言った「神に誓つて、私は切望
する。神が、神への愛を私のものとして下さり、その代わりに私の四
肢全てを奪われることを。」²⁵

オンメ・ヘッサーネ・サデイド Uma Hissan Sadiq とその娘は、ソ
フィヤーン・サウリーの朋友であり、この時代の禁欲主義的スーフィー
のひとりである。ソフィヤーン・サウリーによれば、オンメ・ヘッサ
ーンの娘は、「ミフラーブの中で祈禱して言った。「神よ、誰もが愛する
人と隠遁しております。神よ、私も、我が愛する人である貴方様と隠
遁しているのです。」彼女はこう信じていた。人間の心は、死によつて
すら浄化されることはない。全てのヒンマ（精神集中による霊的力）を、
神に至るただひとつ方向へと向ける以外には。ソフィヤーン・サウリー
は彼女についてこう言った。「彼女の言葉を聞いた後は、我を取るに足
らぬ者であるかのように感じる」²⁶

また、この時代に、シャキーク・バルヒー (810 没) 「バルフの高名
な神秘道導師」と深交をもつていたのが、「バスラの」バフリーイエ
Bahriya である。彼女はムジュタヒドであり、ズイクル（称名）の集会
を開いていた。²⁷

禁欲と敬虔主義、苦行への信奉が、これらの禁欲主義者たちの間
で、のちに神秘主義の発生の主要な核となったが、この時代において
は、まだ「神秘主義」は形成されていなかった。のみならず、アラブ
によつて征服された諸民族、とくに、のちの時代に神秘主義の形成と
発展と拡大において主要な役割を果たしたイランの人々の間には、イ
スラーム自体が、未だ広まっていなかったのである。²⁸ この時期、バ
スラは、禁欲と節制の流れの中心であり、敬虔主義の女性たちは、ア
ラブの民であつた。しかし、イスラーム神秘主義が禁欲と神への畏怖
から、神への愛と靈知へと変遷をとげたのちの世紀においては、徐々に、
非アラブのマワリー「マウラー *hawra* の複数形。ここでは「被護民」
を意味する」の女たちの名が見られるようになる。彼らは、自らの神
秘体験の表現において、神への愛を語るという礎石を築いたのである。
そのひとりがラービア・アダヴィイーアであつた。

イスラーム開闢後の最初の一世紀は、ウマイヤ朝末期に至るまで、
イスラームの衣をまとつただけの新ムスリムたちが受け入れられる条
件は、アラブ部族が、彼らをマワリーとして引き受けることであつた。²⁹ 「ア
ラブがイランと他の被征服地から連れ帰つた多くの捕虜や奴隸は、様々
な部族と個人に配分され、分けられた個々のグループは、「主人と、擬
制の」血縁関係を取り結び、マワリーとして知られるようになった。」³⁰
スラミーの記述によれば、ラービアも、こうしたマワリーの出自で

あつた。

ラービアは、一方では、それ以前の禁欲主義者らによる禁欲と苦行、敬虔主義の流れに連なっており、もう一方では、神秘主義の歴史の第二期において、過度な禁欲と神への畏怖から脱し、神への愛を語ったスーフイーたちの血脈の祖とみなされる。しかし、彼女以前にも、シャアヴァアーネという名の非アラブ *ḡayān* の女³¹ がいた。彼女はアブラに住み、彼女のもとでクルアーンの朗誦を行うために集まる禁欲主義者やアービド、そして、心(カルブ)の徒らの前で、神への愛について語つたのである。

シャアヴァアーネ *Shāwāna*

スラミーの伝承によれば、シャアヴァアーネは、禁欲主義者でムジュタヒドでもあり、神を畏れて号泣するとともに、他の者たちを泣かせる類い希なる力をもつていた。彼女は神への愛と「見神」(ルーヤ・アツラー)について語つた最初の女性であつた。シャアヴァアーネの没年は、『純粹の資質』と『親交の息吹』において、彼女が老年にファズイー・ル・オヤーズ(803没)「メッカに暮らした神秘道導師、ハディース伝達者」に会つたと記されていることから、ラービアの数十年前と考えられる。スラミーによれば、シャアヴァアーネは、イラン人であり「史料中では〈*ajamiya*〉と記されている」、イブン・ジャウズイーによれば、彼女はペルシア語で夫と話をしていたという。アラブによる攻撃以前、クテシフォンがササン朝の夏の都であり、メソポタミアがササン朝支配の中心であつたことを考慮するならば、この地域にペルシア語を母語とする〈イラン人〉がいたことは、なんら不自然ではない。とくに、

アラブの攻撃以前、同地域へはイラン高原の他の地域から〈イラン人〉たちが移住していた。³²

彼女が残している言葉は、彼女が創造主と被造物の間の愛を信じ、生涯を禁欲とイバードに捧げて節制に努め、泣くことを神への「近接」と地獄の業火から逃れるための手段とみなしていたことを示している。シャアヴァアーネの評伝は、ラービアの生涯を伝える逸話と同様に、伝説という後輪のなかに渦巻いている。スラミーは、何よりもまず、彼女の美しく甘美な声に言及している。シャアヴァアーネは、この甘美な声をもつて、説教を行つたという。³³ しかし、のちの時代の聖者伝では、彼女は、最初、楽師であり、酒の宴に加わり、また、彼女に仕える多くの女奴隷を抱えていたと記されている。ある日、シャアヴァアーネは、サーリフ・ムツリーの説教会において悔悛(タウバ)し、イバードと禁欲に目覚め、女奴隷たちを解放して自らの財産を喜捨したのであつた。³⁴

彼女の有名な言葉のひとつに次のようなものがある。「眼は恋い慕うお方 *mahbūb* と別れ、〈彼〉への接見 *liqa'* を熱望する眼は、泣くことなしにおれようか」³⁵ シャアヴァアーネは、神を「恋人」*mahbūb* と呼び、神を「見ること」について語つた、最初の禁欲主義的スーフイーのひとりであつた。すなわち、彼女は、「神への愛」(マハッバ)を表現したラービアの先達であり、後の時代においてアツラーとの「接見」(リカー)を語つた偉大なスーフイーらの先駆でもある。

禁欲と号泣は、当初、神への畏怖の感覚と密接な関係をもつていた。しかし、この禁欲は、徐々に禁欲主義のスーフイーらにとつて、「神を識ることと神への愛、さらに、神との合一のより高い能力を、魂が見

出すために」³⁶、内面（バーティン）を浄化し、魂（ルーフ）を純化する最初の方法となった。

ヒジュラ暦二世紀「西暦八世紀〜九世紀初頭」には、ラービヤ・アダヴィーアと時期を同じくして、「神への愛」という概念が、イスラーム神秘主義においてより広く提起されるようになる。この変化において、ラービヤは驚くべき影響力をもっていた。バダウィー「現代エジプトのアラブ文学研究者」は、次のように述べている。「ラービヤ以前には、誰も神への愛を語る者などいなかった。彼女は、これを、単に言葉として用いているのではなく、体験的な意味と概念によってイスラーム神秘主義に導入した最初の人物である。」³⁷

しかし、ラービヤと同時代のスーフイーたち、あるいは、彼女以前のスーフイーらの言葉に目を向けると、たとえば、この時代の神秘主義の教義の基礎が、禁欲主義と神への畏怖に置かれていたとしても、まず、シャアヴァーネが、その後、シャキーク・バルヒーや、マアルーフ・カルヒー（815没）「バグダードのカルフに生まれた神秘道導師」が、「神への愛」について語った言葉は、禁欲主義の時代から神秘主義の時代への移行において、大きな役割を果たしたのである。シャアヴァーネが、カアバのタワーフ「メッカ大巡礼の際に巡礼者がカアバ神殿の周りを回る儀式。反時計回りに七回廻る」の最中に次のように叫んだという逸話がある。

「私は汝（神）への愛に渴いており、決して渴きが満たされることはないのです。」

さらに、この愛を治療薬のない痛みと称して言った。

シャキーク・バルヒーは、短い記述の中で、初期の神秘家たちの教義における愛の価値と位置づけを記しており、この時代の、禁欲主義から神秘主義への移行の根源を明確に描いている。³⁹ また、マアルーフ・カルヒーは、「人間が抱く」愛を、「神の賜物であり、神の与え給うた力」であると述べる。⁴⁰ しかし、「〈神への愛〉の最初の顕れ」⁴¹を彼女の詩と言葉の中で表現している聖女ラービヤは、確実に、禁欲主義（ズフド）の段階から神秘道（タリカ）の域へと足を踏み入れた。ラービヤの存在と彼女の教義は、神への畏怖に依る無味乾燥の禁欲主義から、「愛に基づく痛みに満ちた靈知」⁴²への転換点なのである。

■ 第二期 神秘主義の時代

1 ラービヤ・アダヴィーア Rabi'a Adawiya

ラービヤ・アダヴィーア（752没）は、イスラーム神秘主義の歴史の中で、最も名の知られた女性である。しかし、彼女の生涯については、詳しい情報や確かな記録は残されていない。ラービヤについての伝承では、時代や場所が錯綜しており、これらの中で描かれるラービヤの像は、彼女以前の、あるいは、彼女以後の女性スーフイーの逸話が混じり合った神話のごときものになっている。『神秘主義聖者列伝』の中で述べられる彼女とハサン・バスリーとの邂逅・対話についての伝承

は、ハサン・バスリーの没年を考慮に入れると、歴史の実証性は持ち得ない。また、ラービアが語った多くの言葉や彼女のものとされる言葉は、その後何世紀かの間に、口承で伝えられたものである。アッタールは、それらを美しい詩的な散文に仕立て、『神秘主義聖者列伝』の中に収めている。ラービアの生涯に関するもつとも古い記述であるスラミーのスーフイー列伝『女性神秘主義敬虔家たち』によれば、ソフイヤーン・サウリーとサーリフ・ムツリーは、彼女と同時代の人物であり、スラミーは、ラービアの言葉の大半を、サウリーが伝える逸話として記している。⁴³

ラービアを「アタキー家のマウラー（女性）」*nawā'at li al-'Atakī* とみなしたスラミーが伝えるところによれば、彼女はアラブではなく、また、ムスリムでもない出自とされていた。⁴⁴ また、アブー・アスマー・アタキー「マルヴのハディース伝達者」⁴⁵ とアブル・ライス・アタキー「サマルカンドの法学者」がマルヴの出であることを指摘し、ラービアがイラン人であったとの説をとる者もいる。とくに、スラミーとイブン・ジャウズイーが伝えるところによれば、彼女の家の粗末な家具の中には、ファールス地方の芹でできた敷物があり、それはおそらく祖先から引き継がれたのであろうと思われた。⁴⁶ また、ラービアがカアバの神殿を重視せず、カアバの神に重きをおいていたことも（訳注）、バーヤズィード・バスターミーのようなイラン人スーフイーに特有のものとみなれたのである。⁴⁷

ラービアが、カアバ神殿を重視しなかったことについて、アブドゥウツラフマーン・バダウイーは、次のように考えている。ラービアは、最初、カアバの物質的側面をその精神的側面から切り離し、カアバの外

見に対してでなく、カアバの意味に対して重要性を認めたのだ。しかし、最終的には、カアバに対し、何の意味も認められないほどに、カアバの意味の全てが彼女にとって消滅したのである。（カアバに対する）こうした考えは、ラービアの時代と彼女を取り巻いていた環境に見られた思想でも他に例がなく、同時代にはそれに対する反応すらなかったほどである。むしろ、カアバの軽視は、のちの時代においてハッラージの教義の中で重要な役割を果たし、「彼に対し不信仰（タクフィール）が宣言され、のちに処刑せられた最も明白な理由」⁴⁸ となったのであった。

アッタールが伝えるところによれば、ラービアは、赤子に着せる産着もないほど貧しい家に生まれ、若くして奴隷の身となった。彼女が、一方では奴隷となったと記され、他方では楽師の境遇に落ちたと記されている『神秘主義聖者列伝』の矛盾した指摘は、この女性の生涯について、確たる評伝を描き出すのを困難にしている。バダウイーは、ラービアが楽師に身を落としたことを確信している。何故なら、もしラービアが生涯の一時に破滅と現世での愛に溺れていなかったなら、信仰と愛においてあれほどにも邁進できなかったであらうと彼は述べる。⁴⁹

また、ペルシア文学では、アッタールが『神秘主義聖者列伝』の中で、神秘家らが四世紀にわたり、この女性について作り上げた伝説を記している。また、マスナヴィー形式で書かれた『神の書』*Tahī Name* では、彼女の愛の熱情を、神秘主義の教義の根幹と位置づけている。ラービアは、禁欲主義に拘泥し、悲嘆と神への畏怖、そして祈りを極度に信奉する女であった。ラービアの言葉は、神への愛という要素によって、彼女を、神秘主義的な熱狂の源泉となった伝説の存在へと変えたので

ある。神への愛を語ったラービアの有名な詩のひとつについては、アブー・バクル・カラバーズイー〔二、および「結び」参照〕やアブー・タリブ・マッキー(936/7没)「メッカ近郊にも暮らした。スーフイー、説教師。」、アブー・ハーミド・ガザリー(1058-1111)「ホラーサーンのトゥース生まれ。イスラム史上最も偉大な思想家のひとつ。のち、神秘主義に回心する」などの多くの神秘主義者たちが解釈を行っている。⁵⁰ しかし、彼らのうち誰もラービアの生涯については記していない。彼女の生涯について最も詳しく述べているのは、アッタールの『神秘主義聖者列伝』である。ラービア・アダヴィーアの生涯に関する逸話と彼女の言葉は、アフマド・アビル・ハヴァーリー(844/5没)「ダマスカスのスーフイー」の妻、ラービア(あるいはラーイア)・シャミー(849/50没)、についての逸話と混同されており、両者を区別するのは容易ではない。⁵¹

ラービアの生涯について散見される記述と彼女の言葉の中で唯一明確な点は、彼女の存在が、神秘主義の歴史における禁欲主義と神への畏怖の時代から、神への愛と情熱、スーフイーによる神秘体験の時代への転換点であったということである。この点で、イスラム神秘主義研究者たちの見解は一致している。アッタールの記述では、ラービアについて、禁欲主義という枠を、人間の精神体験には窮屈であると考えた霊知者としての姿が描かれている。それゆえに、彼女を、アブル・ハサン「あるいは、フサイン」・ヌーリー(907/8没)「ジュナイド(後述)と同門のスーフイー」、フサイン・ビン・マンズール・ハッラージ、アブル・ハサン・ハラカーニー(1033/4没)「バスタームのハラガーンに生まれた高名な神秘道導師」、アフマド・ガザリー(1126没)「神

秘主義思想家。上記ガザリーの弟」、アイヌルグザート・ハマダーニー(1131没)「ハマダーンに生まれた神秘主義哲学者でアフマド・ガザリーの弟子。不信仰宣言を受け処刑される」、といった神秘家らの血脈の祖とみなすことができる。彼らは、精神体験と実践的な「神秘修行」(リヤーザ)によつて、「我」からの脱却を体験し、聞いたもの「知識」ではなく、見たもの「体験」について語る者たちであった。⁵²

ラービアの言葉と詩は、スーフイーらが伝える逸話によつて伝えられ、彼らの教義の中で用いられた。ラービアを同時代の禁欲的神秘主義者らと分かつたもの、また、彼女を禁欲主義(スフド)から神秘主義(タサツウフ)への転換点に位置づけるものは、彼女の思想が、イスラーム聖法の教義の枠を越えていることである。ラービアは、神への崇拜において、地獄への恐怖と天国への望み、(天国で)果樹園の林檎や乳の香に酔いしれることを夢見るといった段階を通り越し、自分と神との関わりを、報いと罰という関係を越えたところにあると考えた。彼女の言葉に次のようなものがある。

「わが主よ、もし、私が、地獄を怖れるゆえにあなたを崇めるなら、私を地獄で焼いて下さい。そして、天上の楽園を希求して崇拜するなら、私をハラーム不如法の身として排除して下さい。もし、あなたのために、あなたを崇めるなら、久遠の美を私に惜しまないで下さい。」⁵³ (藤井訳『聖者列伝』八一—八二頁)

このような創造主と被造物との関係が、何も介在せず、直接のものであるという信仰により、彼女の言葉は、のちの時代のスーフイーた

ちによる表面的には「不信仰」(クフル)な言葉の端緒となったのである。『神秘主義聖者列伝』においてアツタールが伝えるところによれば、ラービアを、イスラーム神秘主義の歴史上、最初の霊知者(アーリフ)とみなすことができる。彼女は、人間と神との関係において、シャリーアの枠組みを越え、自分と神との関係を、何ものも介在しない直接のものであると考えた。そこには、預言者ムハンマドへの敬愛さえ入る余地がなく、また、悪魔への敵意を抱く余地もなかったほどである。スラミーによれば、ラービアは預言者を「被造物」と呼び、アツタールによれば、「神以外の者」と呼んだ。また、次のようにも伝えられる。

「栄光あるお方「預言者ムハンマドを指す」を友として好むか」と尋ねられて、彼女は「友誼を感じております」と答えた。「あなたは悪魔を敵として嫌うか」と問われるとこう答えた。

「慈悲あるお方との友誼のためということでは悪魔と敵対するつもりはありません。」⁵⁴ (藤井訳『聖者列伝』六九頁)

ラービア以後の神秘主義が始まる時代、つまり、ホラーサーンが、イラン的神秘主義の揺籃の地となる熱狂 *shuridegān* の時代において、ホラーサーンの女たち——その多くがニーシャーブルの出身であったが——が、この思想に足を踏み入れた。イスラーム世界全体においては、女性のムジュタヒドやハディース学者、法学者が、連綿と存在しているながらも、ときに、名も評伝も記されぬままであったが、この時代のスーフイー列伝は、女性スーフイーや女性霊知者についても記述を残している。彼女たちは、その神秘体験の表現によって、同時代の

高名なスーフイーたちの列に列せられる。この時代の女性スーフイーらの中には、チュニスやシリア、ダマスカスの女たちの名も多く記されているが、これらに比して、ホラーサーンの女性スーフイーの数は、圧倒的である。

「熱狂の徒」*shuridegān*の血脈の祖にして、陶醉(スクル)の徒、ホラーサーンの偉大な霊知者のひとりであるバーヤズィード・バスターミーの時代は、この点で比類なき時代である。スラミーは、この時代の多くの女性スーフイー——その大半がニーシャーブルとダムムガンで生涯を送った——の名前と言葉を、『女性神秘主義敬虔家たち』において記している。

しかし、注意すべきは、伝記集成に名前が挙げられている全ての女性を必然的に「スーフイー」と呼ぶことはできないということである。彼女らの一部は、敬虔主義とイバードゆえに讃えられていた。そのため、彼女たちを初期の禁欲主義神秘家 *zahed-sūfi* のグループに位置づけることができる。神秘主義が、「直接体験」(ザウク)や「神秘的開示」(カシュフ)、観照(ムシャールハダ)において、驚くべき発展と拡がりを見せたこの時代に、スーフイー列伝の記述には、「神秘家」*sūfi*や「霊知」*arif*と呼ばれ、また、ときに「神の友(聖者)」*awliyāʾ Allāh*とみなされた女たちの名を目にすることができる。この時代、スラミーが女性神秘家らの伝記や地位に対して用いている言葉は、「イバードに邁進する者」[女] *mutaʾabidat*、「(自己と)闘う者」[女] *mujahidat*、「禁欲主義者」[女] *zuhād* から、「女性霊知者たち」*ʿarifāt*、「醉言を語る者」[女] *mutakalimāt al-shahīʾ*、「心的境地(ハール)の持ち主」[女] *sāhibat hāl*へと変化している。「心的境地とは、神秘修行の階

梯に対応して神から与えられる靈的感情」。また、「敬虔さ」*warā*や「畏れ」*khawf*などの語に代わり、「真実」*ṣidq*、「(神への献身の)純粋性」*ikhtisāṣ*、「聖者に現れる」奇蹟」*karamat*といった言葉が見られるようになる。

この時代における女性スーフイーたちの言葉と教えは、非難の徒(マラーマティーヤ)「九世紀のニーシャールブルで生じた神秘主義の一派。外面的な敬虔さを欺瞞として忌避し、自らが非難(マラーマ)の対象となることで神への献身と我執の滅却をはかるもの」の影響とともに、フトウワ「若者らしさ」を意味する自己犠牲的倫理。後述する「ジャヴァーンマルディー」を土台として形成された」の教義からの影響も見られる。神秘主義とフトウワは、二つの異なる思想的潮流に源泉を得ているが、実践(アマル)における神への献身の純粋性(イフラーズ)や、欺瞞(リヤー)の忌避といった原理において、共通の要素をもつ。また、ホラーサーンにおける「非難の徒」の教義の形成過程においては、「寛大の徒」(ジャヴァーンマルディー)「若者らしさ」を原義とする、イラン世界で形成された自我否定、自己犠牲の倫理精神」の伝統と教義も徐々に吸収され、フトウワとともに、神秘主義の教義の一部となつたのである。⁵⁵ 神への献身の純粋性と真実、そして、フトウワの他の原理は、この時代のホラーサーンの女性スーフイーらの教義にも見られるものである。

2 ニーシャールブルの女性神秘家たち

(1) オンメ・アリー *Umm 'Alī, imrā' al-Imād b. Khadrāwīya al-Balkhī*

オンメ・アリーは、ヒジュラ暦三世紀のホラーサーンで名を知られたスーフイーのひとり、アフマド・ビン・ハズラヴィーイェ(854没)の妻である。アッタールは『神秘主義聖者列伝』の中で、彼女の名をファアテメと記している。しかし、スラミーは、彼女の生涯と言葉に関する記述の中で一貫して彼女をオンメ・アリーと呼んでいる。また、スーフイー列伝の中には、彼女の評伝と言葉を、同時代にメッカで生涯を送ったファアティマ・ニーシャールブルと混同している。アッタールは、オンメ・アリーを、イブラーヒーム・アドハム同様、バルフの王族であつたとみなしている。

神秘主義の歴史上、のちの時代において、高貴な出自の者たちが、神からの恩寵(バラカ)を得るために、自分の娘を神秘道の導師(シャーフ、ムルシド)に嫁がせることが一般的となつた。しかし、ファアテメは、この時代のスーフイーについて現存する記述の中で、自分の配偶者を選び、彼と結ばれることを欲し、自らの意志を通した最初の女性である。

「(ファアテメは)バルフ王族の娘であつた。彼女は悔悛(タウバ)し、アフマドのもとに人を遣り、自分を父に乞うようにと言つた。アフマドは、受け容れなかつた。(ファアテメは)もう一度人を遣つた。」⁵⁶

ファアテメ(オンメ・アリー)は、アフマド・ハズラヴィーイェと結婚したのち、自分の全ての財産をスーフイーらに喜捨し、(アフマドが指導する)スーフイーたちの諸事にあたって夫の助けとなり、当時その名をとどろかせていたバーヤズィード・バスターミーの説教の座

にも加わった。彼女とバーヤズィード・バスターミーとの邂逅、および彼女についてのバーヤズィードの言葉は、多くのスーフイー伝で引用されており、スーフイーらの彼女に対する信奉を示すものとなっている。また、オンメ・アリーは、バーヤズィード・バスターミーの説教の場において、顔を覆っていたベールをはずし、彼に対し、自由に言葉を発している。

「アフマドは、バーヤズィードに会わんとし出かけた。ファーティマも彼に同行した。バーヤズィードのもとに着くと、ファーティマは顔からベールをはずし、アブー・ヤズィード「『バーヤズィード』と同じ」に語りかけた。アフマドは、憤慨して言った。『ファーティマよ、バーヤズィードになんと無礼なことをするのだ？』ファーティマは言った。『あなたは私の本来のマフラム「イスラーム法上、ベール等で身体を覆い隠す必要のない相手」であり、バーヤズィード様は神秘道におけるマフラムなのです。私はあなたによって（現世の）愛に至り、この方によって神に至るのです』⁵⁷

スーフイー伝に記され、あるいは、スーフイーらによってその名を伝えられた多くの女たちは、敬虔主義者 *paisa* であった。神秘主義の導師らは、彼女たちの言行の影響を受け、あるいは、彼女たちの言葉や逸話を伝えている。しかし、ファーティマは、神秘修行の方法を自ら言葉にした。それは、彼女の神秘道における求道への精通を示すものでもある。

「酔言の導師」 *sheykh-e-shaitah*、「靈知者たちの王」 *sultan al-arifin* と

して知られるバーヤズィード・バスターミーは、神秘体験において、同時代のスーフイーらの神秘体験を表した言葉を批判し、あるいは、靈知として無価値であるとみなすほどの域にまで達していた。しかし、彼は、オンメ・アリーを、フトウワとヒンマ（精神集中による靈力的）の範と呼んでいた。

『神秘主義聖者列伝』では、次のように記されている。

バーヤズィードはアフマド「オンメ・アリーの夫」に尋ねた。

「いつまで旅を続け、世界を巡るつもりかね」

アフマドは答えた。

「水を一つとところに止めておこうとしても形が定まらず姿を変えてしまいますゆえ」

導師バーヤズィードがこう言った。

「なぜ大海であろうとせぬのか。変化することも汚れることもないではないか」（藤井訳『聖者列伝』一七六頁、下線部は前田による）

また、ヤヒヤー・ムアーズ・ラーズィー（871没）「バルフで暮らした高名な禁欲主義者、説教師」がバーヤズィードに次のように手紙を書き送った。

わずか一杯の靈知の酒杯を口にただけで、我を忘れ、始めも終わりもない永遠の酩酊に入り込む者について何かお言葉を下され」
バーヤズィードは返答を書いた。

「()には昼夜を分たず、存在の永遠の海洋そのものをワインのよう

に飲み干しながら、もつとないのかと咆哮している一人の男が、お
りますぞ」⁵⁸ (藤井訳『聖者列伝』一六六頁)

これらの伝承は、バーヤズィードが、同時代のスーフイーらの神秘
体験を、ひとりよがりな言葉だけのものとみなし、彼らの存在を歯牙
にもかけていなかったことを示している。にも拘わらず、バーヤズィ
ードは、ヒンマの点でも、また、神秘体験の観点でも、オンメ・アリーを、
神秘的求道の範と見なしていた。彼は、オンメ・アリーについてこう
述べている。

「神秘主義を抱くものは皆、アフマド・ハズラヴィーエの伴侶オンメ・
アリーのときヒンマを得るべきである。あるいは、彼女の心的境
地のとき、心の境地に達するべきである。」⁵⁹

アフマド・ハズラヴィーエが、バーヤズィードに忠言を乞うた時、バー
ヤズィードはこう言った。

「お前の妻からジャヴァーンマルディーを学ぶがよい。」⁶⁰

オンメ・アリーは同時代の偉大なスーフイーたちとも深交をもった。
アブー・ハフス・ネイシャープリーは、神秘主義を男性のみの教派
と考え、神を知る道においては、女たちの道はないと考えていた。し
かし、オンメ・アリーの人物と信仰を知って以降、次のように言った。
「いつも、女たちの語ることを忌み嫌っていた。アフマド・ピン・ハズ

ラヴィーの妻、オンメ・アリーを見るまでは。至高なる神が、自身の
望まれる場所に靈知 *Ilm al-Haqq* を置かれたのだと知った。」また、オンメ・
アリーは、次のように信じるスーフイーのひとりであった。神の人々
への愛は、彼が彼らを善と美性へと招き、彼らに苦難が降りかかるこ
とをよしとしないほどである、彼らが神を愛する限り。

オンメ・アリーに関する逸話は、女たちが、神への「近接」や神秘
道における求道を学ぶために、彼女のもとを訪れていたことを示して
いる。⁶¹

(2) ファーテメ・イェ・ネイシャープリー Fatima al-Nayshaburiya

この時代、もうひとりの女が、同時代のスーフイーたちの間において、
靈知と神への純粹な献身、実在(神)の観照(ムシャハダ)について、
語っている。それは、ファーテメ・イェ・ネイシャープリー (937/8
没)であり、彼女はホラーサーンの偉大なスーフイーのひとりであった。
彼女のクルアーンへの理解は、同時代のスーフイーらの驚嘆的であつ
た。スラミーは彼女について、次のように述べている。「彼女の時代の
女たちの中で、彼女のごとき者はいなかった」

ファーテメ・イェ・ネイシャープリーは、メッカに住んでおり、
エルサレムにも旅をしたことがあつた。スラミーは、彼女とズン・ヌー
ン・ミスリーがメッカで邂逅したという逸話を伝えている。ファーテ
メは、ズン・ヌーンに何かを贈ったが、ズン・ヌーンは、それを受け
取らずに言った。「婦人たちから物を受け取ることは、恥辱であり、害
悪である。」すると、ファーテメは、こう言った。「この世に、単なる

道具「であるような外面だけ」*al-jahab* を見ることをしない者以上に、善良なるスーフイーはありません。」

また、ズン・ヌーンについては、次のような逸話がある。彼は、エルサレムへの旅の途中で、ファアテメ・イェ・ネイシャープリーに会い、彼女に対し、自分に忠告と戒の言葉を与えるようにと請うた。ファアテメは、彼に対し、行為と発言において、真実と（己との）闘い（ムジャーハダ）が必要であることについての忠告を与えた。彼女の神秘体験と霊知的見地の証であるファアテメの言葉は、同時代の偉大なスーフイーであるバーヤズイード・バスターミーとズン・ヌーン・ミスリーが賞賛の言葉を述べるほどであり、ことに、ズン・ヌーンは、彼女をスーフイーたちの中で最も偉大なスーフイーとして挙げ、彼女を「神の友（聖者）」であり、自らの師であるとみなすほどであった。彼は、ファアテメについて、次のように述べている。

「私が生涯で出会った最も高い地位の人物は、メッカに住む、ファアテメ・イェ・ネイシャープリーという名の女性であった。彼女のクルアーン理解は驚くべきものであった。∴彼女は、神の友（聖者）*awliya Allah* のひとりであり、私の師である。この女性は、神を識ることにおいて、バーヤズイード・バスターミーが次のように述べるほどの地位に達していた。「私は生涯において、唯一人の男と一人の女以外の者を見なかった。その女とは、ファアテメ・イェ・ネイシャープリーであった。彼女が体験していない、神秘道のいかなる階梯もないことを私は知った。」⁶²

(3) アマトツラー・ジャバリーイェ *Amat Allah al-Jabaliya*

この時代のホラーサーンの女性スーフイーのひとりだが、アマトツラー・ジャバリーイェである。彼女は、ダムガーンのヌーグアーバードに暮らし、「神の本質の顕現と奇蹟」*ayat wa karamat* を備えし者であった。スラミーは、次のように伝えている。

「彼女「アマトツラー」は、バスタームから一ファルサング離れた村に住んでいた。／彼女は、バーヤズイードと彼の行為について、彼女の夫に知らせ、言った「アブー・ヤズイード様は今、これこれのことをなさっています」⁶³。バーヤズイードは、これを知ると、アマトツラーの力を他の者たちには分からぬように振る舞い、彼女についてこう言った。「私は、精神集中による霊的力 *Quwwa* をアブドツラーに期待したが、それは、彼の妻に顕れた。」⁶³

(4) フオタイメ *Fu'ayma imra'at Hanan al-Qasbi*

フオタイメは、ハムドゥーン・カツサル（845没）——彼は、「非難の徒（マラーマティーヤ）の祖である——の妻であり、ホラーサーンのスーフイーのひとりである。スラミーは、彼女を「心的境地において高い地位に達せし者「女」*kabirat al-ghai*」の名で呼んでいる。神秘道の実践に関する知識や、自己を識ることにおける彼女の言葉が残されている。フオタイメは、人間の心（カルブ）の豊饒を、現世に執着しないことであるとみなし、その荒廃を、人々（現世）にとらわれることであると考えていた。

「彼女は言った。「己を識る者は、神に隷従すること *'ubudiya* 以外の

ことに頼ることはなく、彼「神」の下僕たること *mawla-hu* 以外のことは誇らぬのである』 [[*Dhikr al-Niswal*, p.95]

また、彼女は、叡智ある者とは、彼との深交が人間の心（カルブ）を生きたものとするような者であると信じていた。さらに、彼女は、人々との交わりに関するスーフイーのふるまいについて、次のように述べる。

「スーフイーとは、もしある者が彼を求めて来るならばその者を受け入れ、もし、彼から離れて行くならばその者を忘れぬような人物のことを言う。ある者が彼と深交をもつならばその者に善事を教え、もし、彼から離れていくとしても己との深交をその者に強くない人物を」⁶⁴

(5) ファフルイーエ・ベンテ・アリー *Fakhrūya bint 'Alī*

スラミーの祖父、アブー・アムル・ビン・ノジャイド (975/6没) 「ハディース伝達者、スーフイー」の妻ファフルイーエ・ベンテ・アリーも、ホラーサーンの女性スーフイーである。同時代のスーフイーらの間で、高い地位を有していた。夫アブー・アムル・ビン・ノジャイドは、彼女についてこう言った。「私がファフルイーエとの深交から得たものは、アブー・オスマーン・ヒーリー (910/1没) 「ヒーレに暮らしたスーフイー」との深交から得たものに決して劣らない。」また、アブー・アリー・サカファイも、彼女の叡智を讃えた。ファフルイーエはこう信じていた。「人間が自らの知識 *ilm* によって語るときには、己の心 *qalb* と我執 *naʿw* を飾り立て、己を言葉の美しさによって高めようとする。また、知識によって実践しようとするときには、我執と心を苦惱させ、実践 *muʿamala* における神への純粋な献身 *ikhlās* の不足ゆえに、己を卑しき

ものとする。」⁶⁵

(6) アイエシエーイーエ・マルヴズイーイーエ

'Īshā. imrān Ahmād b. al-Sirrī al-Marwazīya

アイエシエーイーエ・マルヴズイーイーエは、この時代のスーフイーであり、ジャヴァーン・マルディーを信奉し、フトゥーワを教えていた。彼女は、クーファアに住んでいたシーア派のハディース学者、アフマド・ビン・セッリーの妻であった。しかし、アイエシエーイーエは、ニーシャープールのアブー・オスマーン・ヒーリーの家に住んでいた。

「私「著者スラミー」は、アイエシエーイーエがこう言うのを聞いた「靈知者 *arif* の叡智は、その心 *qalb* の鏡であり、靈知者の魂 *ruh* は、叡智の鏡である…神の恩寵とは、この鏡の光 *nūr* であり、靈知者の慧眼 *basīra* は過ちを善行から顕わとする」

彼女は、スーフイーたちとフトゥーワの徒に従い、彼らと共にいることを、自身の安らぎであり、神秘修行であると考えていた。彼女はこう述べた。

「フトゥーワの徒が私を求めて訪ねて来ようとする時、その者が私のもとに辿り着くなり、私はその者の思念を私の内面において、光のように感じるのだ。そして、私がその者によく仕えることができたなら、その光は、私の内面に残り、また、よく仕えることができなかつたなら、その光は消えてしまう。」⁶⁶

(7) ファーテメ・ベンテ・アフマド・ビン・ハーニー

Fatima bint Ahmad b. Hani Naysaburiya

アフマド・ビン・ハーニーの娘ファーテメも、この時代のスーフイーであり、アブー・オスマーン・ヒーリーと親交があった。彼女は、ニーシャープールの富豪であり、自身の財産をフトウワの徒のために投げ出した。アブー・オスマーンは、ファーテメの喜捨は、現世でも来世でも報いを求めることをしない、フトウワによる喜捨であると考えていた。

「ファーテメは言った『現世は、愚者たちの畏である。叡智と神の恩寵を持たぬ者が、その畏にかかるのである』」⁶⁷

(8) アイエシエ・マルヴズイー

‘Aisha bint Ahmad al-Tawī al-Marzūya, zawja ‘Abd al-Walīd al-Sayyārī

アブドゥルヴァーヘド・サイヤーリー (985/6没) の妻アイエシエ・ベンテ・アフマド・タヴィーレ・マルヴズイーも同時代の知者にしてムジュタヒドのひとりであった。スラミーによれば、「彼女の時代に、心的境地 *ḥal* において彼女より優れた者はなかった」

彼女は、スラミーと同時代にニーシャープールに暮らし、自分の財産をスーフイーたちのために遣った。彼女は、貧苦 *faqr* を舐めていない者には、清貧の美德 *fadāḥil al-faqr* は感得されないと考えていた。また、ある者が彼女の喜捨を受け容れず、女から物を受け取ることと恥辱とみなしたとき、彼女はこう答えた。「神への謙従 *ḥudūya* に対して栄光を求める者は、己の卑しき *ru‘ūna* を示しているのである」⁶⁸

ホラーサーンのフトウワの導師であったアブドゥッラー・サジュ

ズイー (884/5-) の妻オンメ・アブドゥッラー Umm ‘Abd allāh. imra‘a abī ‘Abd allāh al-Sajzī ([*Dhikr al-Niswāq*, p.92) ‘アブー・ハフス・ネイシャープリーの妻アイエシエ ‘Aisha imra‘a abī Ḥafṣ al-Naysaburi ([*Dhikr al-Niswāq*, p.70) ‘アブー・オスマーン・ヒーリーの娘アイエシエ・ネイシャープリー「以下、(9)を参照、その娘でアブー・オスマーン・ヒーリーの孫オンメ・アフマド」(9)、そして、アフマド・イブン・ハムダーの娘オンメ・ホセイ、オンメ・コルスーム (11)、アズイーゼイー・ヘラヴィイー (12)、アブドゥッラー・ハムシャープズの娘オンメ・アリー (13)、ソライレイー・シャルギーイー (14) も、この時代のニーシャープールの女性スーフイーであった。

「アブドゥッラー・サジュズイーの妻」オンメ・アブドゥッラーによる次の言葉が残されている。

「人の生とは汝の心を〈彼〉への接見 *liqā’* へと広げ、神へと近づくこと、この世とこの世の人々に囚われぬことへと汝を導いてくれる者との邂逅 *liqā’* である。」⁶⁹

(9) アイエシエ・ネイシャープリー、オンメ・アフマド

‘Aisha bint abī ‘Uthmān Sa‘īd b. Ismā‘īl al-Ḥirī al-Naysaburi

Umm Ahmad bint ‘Aisha bint abī ‘Uthmān

アイエシエ・ネイシャープリー (957/8没) は、ニーシャープールの「心的境地」*ḥal* において優れた者であり、神秘道においては、父アブー・オスマーン・ヒーリーの弟子であった。アイエシエは、

次のように信じていた。

奴隷を蔑む者は、その者の喜びをそうでならぬならぬようには、知っていない。「創造主を愛する者は、彼の被造物をも偉大なものとみなすのである。」

また、娘オンメ・アフマドへの、アーイエシエの言葉が残っている。「やがて消滅するものに心を囚われるなかれ。過ぎゆくものを嘆くなかれ。神に心を向けよ。神の赦しに預からぬことをこそ嘆け。」⁷⁰

オンメ・アフマドも、「ヒンマhimmaと心的境地hal」と（スーフイーとしての）ふるまいknudj」において、同時代に比類なき存在であった。「彼女は言った。『己自身の欠点を知るとき、その者は、自らの欠点から赦されるのである』／彼女は言った『自らの欠点に甘んじ、それを正そうとせぬ者には、神は、無為な言葉を吐く者の定めを与えるであらう』」⁷¹

(10) オンメ・ホセイン Umm al-Husayn bint Ahmad b. Hamdan

アフマド・イブン・ハムダンの娘、オンメ・ホセインは、アブー・ハフス・ネイシャープルーリーとアブー・オスマーン・ヒーリーの朋友にして、ニーシャープールのスーフイーであった。彼女の言葉は、非難の徒（マラーマテイヤー）の教義の影響を示すものがある。

「彼女は、こう言った。『神は、天国を、敬虔なる信徒ら mu'minin の魂 anfus に報いるものとして創られ、彼らの心 qulub を、神のご意思 nazar の在処として作られた。』⁷² そのため、神の信徒らは自らの魂を現世のものに売り渡してはならず、神のご意思の在処を、神のご不快の

原因から護るよう努めなければならないのである、と彼女は信じていた。神秘道に関する彼女の言葉として、次のようなものがある。

「神秘道の徒は、自らの絨毯として土を、自らの食べ物として空腹を選ばなければならない。そして、自らの喜びとして哀しみを選び、世の人々からの拒否を自らの受け容れられた証とみなさなければならない。また、自らの栄光として、恥辱を選び取らなければならない。」⁷²

(11) オンメ・コルスーム Umm Kothum al-mar'ufa bi-khalā

Khala（母方の叔母）の意）として知られるオンメ・コルスームは、アブー・アリー・サカフイーとアブドゥッラー・モナーゼル（940/1没）「ニーシャープールのスーフイー、非難の徒（マラーマテイヤー）の導師」、アボル・ガーセム・ナスラーバーディー（977/8没）「エスファハンにハーンガーを有していた神秘道導師」の崇敬を受け、かつ、彼の親族でもあった。ゴラシイエ¹⁵・ナサヴィイエ¹⁵は、次のような伝承を伝えている。あるときオンメ・オルスームと共に山へ出かけると、彼女は、胸が苦しくなったので街へ帰りたと言った。街へ戻ると、ゴルシイエは、オンメ・コルスームに、何故胸が苦しくなったのかと尋ねた。

「すると、彼女は言った。『神の力 qutra』の証、つまり、山」を見たことよって、全能の神 al-qadir に意識を向けることができなくなってしまうからです。』

また、「私『著者スラムミー』は、ハーラ・コルスームがこう言うのを聞いた『wajd（感じること）は言葉で説明できるものではない。何故なら、

それは、下僕「人間」における神の神秘だからである。もし、神が、この神秘が顕わになることをお望みならば、それは、顕わとなるだろう。もし、隠されたままであることをお望みになるなら、それは、隠されたままとなるだろう。」⁷³

(12) アズイーゼーイエ・ヘラヴィーイ *'Aziza al-Haraviya*

アズイーゼーイエ・ヘラヴィーイは、「(真理を表す)舌の備えし者」[女]にして、心的境地の持ち主「女」*'al-ḥibat al-ḥan wa ḥal* であり、スラミーと同時代の人物にして、アブドウツラフマーン・ビン・シャフラン「ヘラートのスーフイー」の朋友であった。彼女は、ヘラートからニーシャーブルに移り住んで彼の地に留まり、当地で没した。

「私「著者スラミー」は、ヘラヴィーイがこう言うのを聞いた『禁欲主義者 *naḥbi* は、(現世的) 必要性から王と交わることを望み、靈知者 *ḥakīm* は、(精神的) 必要から、王によって深交を望まれる』…『アッラーこそは、お前たちを創造し、養い育て、死に至らせ、次にまた生き返らせ給うお方』*「クルアーン、三〇・三九(訳注3) 誰にも人間の寿命を増やす力がないように、誰も人間の糧を増やすことはできないのである」*」

また、「私「著者スラミー」は、オンメ・ホセイネ・ゴラシイエがこう言うのを聞いた…私はアズイーゼーイエ・ヘラヴィーイがこう言うのを聞いた。『禁欲主義者 *naḥbi* と神に近接する者 *mutaqarrin* は、自分たちの意識の高みから人々を見ているがゆえ、彼らの目には、人々は卑しいものに見えるのである。』⁷⁴

(13) オンメ・アリー・ペンテ・アブドウツラー・ハムシャーズ

Umm 'Alī bint 'Abd al-lāh Ḥamshārī

オンメ・アリー・ハムシャーズは、高位の神秘家にして、「ニーシャーブルの女たちの中で、最も偉大な者」[男]たち *Kibar nisā' Naysābur* であった。彼女は、アボル・ガースム・ナスラーディーの朋友であり、同時代の神秘導師らと深交をもち、彼らから敬意と尊敬を受けていた、オンメ・アリーは、(神に対する) 隷従を神秘道を行く者の靈知とみなしていた。彼女はこう信じていた。(神に対する人間の)「奴隷性」*'ubūdiyya* の真理の知を解した者は、すぐさま、神の「主性」*rubūdiyya* の知に至ると。

「私「スラミー」は、オンメ・アリーがこう言うのを聞いた『被造物』とそれに心を囚われること』はすべて、奴隷を彼の創造主から分かつ原因である』⁷⁵

(14) ソライレイエ・シャルギーイ *Surayra al-Sharqiya*

ソライレイエ・シャルギーイは、ニーシャーブルの「心的境地において偉大なる者」[女] *'azīmat al-ḥal* にして、アブー・バクル・ファールスィー (1038/9 没) の朋友であった。スラミーは、オンメ・ホセイネ・ゴラシイエが伝える、ソライレの言葉を記している。

「私「オンメ・ホセイネ・ゴラシイエ」は、彼女「ソライレ」がこう言うのを聞いた『知識 *'ilm* の細部は、最終的には、ふたつの知に結実する。それは、(神の)「主性」*rubūdiyya* の知と人間の「奴隷性」*'ubūdiyya* の知である。最後には、奴隷性の知は消え、残るのは、主性の知である。』

また、ゴライシイエの伝えるところによれば、ソライレはこう言った。「(神の)力を否定する主たる要因は、それを解する力の無能さにある。」さらに、苦難 *al-ḥala* と恵み *al-niḥa* は、ひとつのものであると述べて言った「真実なる者たち *sādiqin* は、苦難の降りかかる状況においてこそ明らかとなる。」⁷⁶

(15) ゴライシイエ・ナサヴィエ *Qurayshya al-Nasawīya*

ゴライシイエ・ナサヴィエは、ニーシャーブルのスーフイーにして、心的境地の持ち主であった。彼女についてのスラミーの記述は、ホラーサーンの女性スーフイーの置かれた境遇に関して、注目すべき点を含んでいる。スラミーは、彼女の評伝を、ふたつの名「オンメ・ホセイネ・ゴルシイエとして知られる、ジヨムエ・ピントウ・アフマド・ピン・モハンマド・ピン・ウバイドウツラー」*Jum'a bint Ahmad b. Muhammad b. Ubayd allāh al-marūfa bi Umm al-Fuṣayn al-Qursīya (Dhikr al-Niswaj, pp.119-120)* および、「ゴライシイエ・ナサヴィエ」*(Dhikr al-Niswaj, p.105)* によって記した。さらに、彼女について、知識 *ḥim* と心的境地 *ḥal* において、同時代に無二の存在であり、また、自らの財産をスーフイーらのために投げ出したと記している。ゴライシイエ・ナサヴィエは、アボル・ガセム・ナスラーバーデーの朋友であり、アブル・フサイン・ハズリー「バグダードの法学者」、および、同時代の他の導師らと深交を結んでいた。スラミーは、この女性スーフイーについて、彼女自身から直接聞いた逸話を記している。

「私〔著者スラミー〕は、彼女がこう言うのを聞いた。…私がシャイフ〔導師〕・アブル・フサイン・ハズリーのもとを訪れたとき、彼は私にこう言った。『お前の朋友は誰か』私はこう答えた。『ナスラーバーデーです』彼〔ハズリー〕はこう言った。『彼〔ナスラーバーデー〕の言葉のうち、いずれを記憶しているか』私は答えた『彼〔ナスラーバーデー〕はこう言った、〈自己の否定 *inḥā* が真正なる者は、その靈知 *ma'rifā* も完全なものとなる〉と』ハズリーは黙した。／私は帰り、「事の子細を話すと」ナスラーバーデーは(私の返答に)満足した。『また、私〔著者スラミー〕は、彼女がこう言うのを聞いた。『知識 *ḥim* と実践 *ḥana* の恩恵が私の手に流れている。己のことを自慢する者に対し、私はこう言いたいのです…知識 *ḥim* は、それをひけらかすようなものではない。それは、単に言葉だけのもの *kalām* であり、発せられるもの *ḥim* にすぎないのです。知識 *ḥim* とは、まさしく神が預言者に言われたもの〈されば汝、アツラーのほかに神はないと知れ〉』クルアーン、四七・二一(訳注4)』⁷⁷

ゴライシイエが残している言葉は、彼女の神祕道への精通と神秘体験を伝えている。また、彼女とアボル・ガセム・ナスラーバーデーの議論には、彼女の率直さと力強さの証をはっきりと見ることができ、ナスラーバーデーは、ニーシャーブルの高名な神秘家であり、スラミーの導師にして、アブー・アリー・ルドウバーリーとシブリー(946没)「ホラーサーン出身のスーフイー」の朋友であった。スラミーは「スーフイーの階層的分類」において、彼を、真理の知に精通した、「知識と心的境地における時代の最も偉大な導師」、と呼んでいる。⁷⁸ この偉大なる導師とゴライシイエの間で交わされた言葉のいくつかを、

スラミーは記述している。

「ある日、彼女「ゴライシイエ」は、ナスラーバーディーに言った。「あなたの言葉は何と美しいのでしょうか。しかし、あなたのスーフイーとしてのふるまい *akhlaq* は、何と醜悪なのでしょうか」

ナスラーバーディーの地位と、神秘道の弟子たちに対する彼の導師としての振る舞い、また、神秘主義の教義において、通常、求道者が自らの導師を絶対的に信奉することを考えると、ゴライシイエとナスラーバーディーの関係が、弟子と師、神秘道の求道者と導師の関係ではなく、ゴライシイエが、自分を完全にナスラーバーディーと同格であると考えていたこと、また、自身が彼の心の向きを批判する資格があると考えていたことが分かる。ここでのゴライシイエによるナスラーバーディー批判は、実際に、彼が自分のイルム知識に対し自負に対して成されたものであった。

スラミーは、また、次のようにも記している。「ある日、彼「ナスラーバーディー」は、彼女「ゴライシイエ」に言った。「私の元には来るな!」ゴライシイエは、答えた。「では、我らを招かぬがよい、そなたの元には来ぬように!」

このやり取りから、まず、当時のニーシャープールでは、女たちが説教集会の場に招かれていたことと、男性スーフイーたちと同席していたことが分かる。そして、第二に、ナスラーバーディーが、ゴライシイエの批判や彼女の見解、問いに対し、耐え難くなったことを示している。

また、スラミーは別の箇所でも、次のように記している。「ある日、ナスラーバーディーが、彼女「ゴライシイエ」に言った。「黙れ!」彼女は言っ

た。「貴方が黙るまで、私も黙りません!」

恐らくこのふたりのスーフイーの論争の原因は、ゴライシイエの率直さ、そして、ナスラーバーディーの知識への自負に対し、彼女が耐え難く思っていたことのほか、ゴライシイエのものとされる次の言葉にも見ることが出来る。

「ゴライシイエは言った。「いかなるものも、疑念ほどには、私を苦しめはしない。もし、ものの真理を理解したなら、私は黙らましよう。私は静まりましよう。神の恩寵が私のうえに顕わとなりましよう!」

彼女が自らの疑念に対し、黙っていることができなかつたこと、また、ものの真理を理解するまでは、いかなる返答も容易に彼女を納得させることはなかつたことが、ゴライシイエとナスラーバーディーとの激論の原因であった。⁷⁹

3 ダームガーンの女性神秘家たち

アーイエシエ||イエ・デイーンヴァアリー「以下の(1)参照」と、ズイヤード||イエ・タルズイイエ *Ziyāda bint al-Khujāb al-Jarziya*、アフマド・ビン・ハイヤヴィー||イエの娘マレケ⁽²⁾、ファアテメ・ペンテ・エムラーン⁽³⁾、アブドゥーセ・ペンテ・ハールス⁽³⁾は、この時代のダームガーンのスーフイーである。

(1) アーイエシエ||イエ・デイーンヴァアリー *'Aisha al-Dinwariya*

アーイエシエ||イエ・デイーンヴァアリーは、神秘道において、イブ

ラーヒーム・シーバーン・ゲルムスィーニー (948/9 没) 「ジャヴァールの高名なスーフイー」の弟子のひとりであり、彼の遺言を伝えている。 ([Dhikr al-Niswal, p.68])

(2) マレケィイエ・ハイヤヴィーイエ *Malika bint Ahmad b. Hayawya*
マレケィイエ・ハイヤヴィーイエは、ダムガーンの王族の娘であり、「心的境地の持ち主」*salbat al-hal*であった。夫ハサン・ビン・アリー・ビン・ハイヤヴィーイエとともに、メッカ巡礼の旅をした際、シブリーに会っている。

「シブリーは、ハサンに対して言った。『汝は男であり、これは女だ。しかし、彼女は心的境地』⁸⁰において、汝よりも高い地位に達している」
彼女の夫について、次のような逸話がある。彼は、私はシブリーの言葉を、心から実感した、と述べる。マレケは、メッカ巡礼に来ていた黒人達に、自分もついていた金を全て喜捨したため、夫が「いくらかの金を残しておくべきだ」と言うと、こう答えた。
「彼女は私にこう言った。『ハサンよ、どれほど、その言葉を繰り返すのか？ここで貴方の目には黒人たち以外のものは見えないとでもいうように！』」⁸⁰

(3) ファアテメ・ペンテ・エムラーン、アブドゥーセ・ペンテ・ハーレス

Fa'ima bint 'Imrān, 'Abdusa bint al-Harith

ファアテメ・ペンテ・エムラーンとアブドゥーセ・ペンテ・ハーレスは、

全生涯を、スーフイーたちへの奉仕に捧げた。スラミーが「心的境地において偉大であり、ワジュド（感じること）において激しい」*Kabirat al-hal va shadidat al-wajd*と呼んだファアテメは、アブドゥウツラー・ザーヘドの朋友であり、アブドゥウツラー・ムハンマド・ムーセリーは、彼女を、「時のラービア」と呼んだ。

また、アブドゥーセ・ペンテ・ハーレスも、スラミーによれば、生涯のうち三十年をスーフイーらへの奉仕に捧げたのだった。⁸¹

4 オンメ・モハンマド *Umm Muhammad* と

息子イブン・ハファイフの修道所

ニーシャープールの出自である女性スーフイーとして、「偉大なる導師」*Shekhe Kabir* の名で知られるアブドゥウツラー・ムハンマド・ビン・ハファイフ (931or942or981 没) 「シーラーズの神秘導師。ハファイフイヤー学派の祖」の母、オンメ・モハンマドがいる(訳注6)。オンメ・モハンマドの父は、ニーシャープールのキャラーミーヤ「アブドゥウツラー・ムハンマド・ビン・キャラム」が創始した一派」と関わりをもち、若年時代にシーラーズに移住した、偉大なスーフイーであった。彼女は、敬虔主義者 *patka* であり、神秘の開示と観照の徒であった。

オンメ・モハンマドはスーフイーの一家に育つたため、神秘道に通じており、息子にも神秘道に則った教育をしたいと切望した。ムハンマド・ビン・ハファイフの神秘主義への指向には、母親が多大な影響

を及ぼしている。イブン・ハファイフは、神秘主義の歴史上、自分の母から弊衣（ハルカ）を与えられた唯一の神秘家である。神秘主義の教義において、弊衣を与えられるとは、実践的な意味でも、また、精神的な意味でも、神秘道において指導を受ける許しを得ることであり、弊衣を与える者は、導師（シャイフ、モルシド）の地位を有していなければならなかった（訳注5）。イブン・ハファイフは、神秘道における母の達している地位を信奉していたため、のちに、イブン・アター——ハッラージへの不信仰宣言（タクフィール）をよしとせず、彼を真理にかなう者とみなした「イブン・アターは、ハッラージの思想を受け入れ、ハッラージと同年に処刑されたスーフイー」——が彼に弊衣を与えようとした際にも、母から下賜されていた弊衣を脱ごうとはしなかった。

イブン・ハファイフは、シーラーズに修道所を造り、神秘家たちの教育と指導にあたって、〈偉大なる導師〉として知られるようになった。彼の説教集会には、何千人もの弟子たちが参席したという、彼の母オンメ・モハンマドも、修道所の女弟子たちの最前列に座った。⁸² また、二度のメッカ巡礼——一度は沙漠から、もう一度は海から——も、オンメ・モハンマドは、〈偉大なる導師〉に伴って旅した。

女性スーフイーについて残されている断片的な伝承を見ると、ホラーサン、とくに、ニーシャープールでは、女性スーフイーらが集会への参席を許されていたことが伺える。しかし、修道所や導師の説教集会に参席する、神秘道の門下（モリド）としての女たちに関する最初の記述は、〈偉大なる導師〉の修道所に関するものである。オンメ・モハンマドは、この時代、シーラーズの修道所での神秘修行における

女性の存在という点で、極めて大きな役割を担っていた。もし、彼女の存在がなかったら、イブン・ハファイフの修道所にも、また他の多くの修道所や神秘道場にも、女の姿はなかったであらう。

ニーシャープールの神秘家たちの修行の方法や思想に影響を受けた、オンメ・モハンマドの家族の神秘道への指向は、疑いなく、女性と神秘修行との関係に対する彼女の姿勢に、大きく影響していた。オンメ・モハンマドの父がシーラーズに移住した時期は、ニーシャープールの女たちがスーフイーらの集まりへ足を踏み入れるようになった時期に近い。そして、オンメ・モハンマドがシーラーズにおいて、修道所の門戸を女たちに開いた時期、ニーシャープールの女性スーフイーらは、ヴァハティイーエーエー・オンメ・ファズル⁵参照のように、説教集会で教授していたのである。

女の弟子を受け容れたイブン・ハファイフへの批判からは、ヒジュラ暦四世紀（西暦一〇世紀）のシーラーズにおいて、女たちが修道女に出入りすることがどれほど奇異であったかを見て取ることができる。イブン・ハファイフの修道所に反対する者たちが作り上げた、のちのスーフイー伝に記された逸話からは、女たちが修道女に出入りすることが、一部のスーフイーらの目には、神秘道の教義における革命的な出来事とみなされたことを示している。イブン・ジャウズイーは、彼が聞いた話として次のような逸話を伝えている。

「弟子の追悼会において、シャイフ「イブン・ハファイフを指す」は、彼の門下以外の者がその場にいらないことを確かめると、男の弟子たちと女の弟子たちに交接するようにと命じた。」⁸³

女の弟子が修道所にいるということは、それに反対する者たちにとつて、耐え難いことであった。イブン・ハファイフに対し、中傷と非難が巻き起こり、二世紀ののちにも、イブン・ジャウズイーが「偉大な導師」の教義を「危険なるもの」*al-khatarat*、「悪魔の」*al-shaykh al-awwas*と呼ぶほどであった。スラミーが「導師の中の導師」*shaykh al-mashaykh*と呼び、その清浄なる精神と善とを讃え⁸⁴、その敬虔さ*taqwa*ゆえに、神秘主義の歴史上、「偉大なる導師」と称された人物も、女たちへの敬意と女を修道所に受け入れたことによつて、イスラーム聖法と倫理に反する存在とみなされたのである。

イブン・ハファイフの修道所に対する誹謗中傷にも拘わらず、この導師は、神秘主義の歴史における「導師の中の導師」にして、神秘道の枢軸（クトゥブ）とみなされ、同時代の高名な神秘家らの崇敬の対象とされている。スラミーは、彼のもとに参じ、彼の言葉を引用する許しを得ている。また、ニーシャープールの偉大な女性スーフイーであるヴァハティイーエ・オンメ・ファズル（後述）は、晩年、イブン・ハファイフに会うため、シーラーズを訪れた。

イブン・ハファイフに対する誹謗中傷は、導師の修道所の門戸を女たちに開いた創始である母オンメ・アリーの尊厳を減じるものではなかった。彼女に関する逸話は、四〇〇年ののち、「親交の息吹」のなかにも記されており、彼女の神秘道における地位へのスーフイーらの信奉を示すものとなっている。

「ラマダン（断食）月の最後の十日、（偉大なる導師）は、夜通し祈禱していた。カドルの夜「預言者に初めての啓示が下された夜。ラマダン月二七日の夜とする説が多い」になり、彼は屋根に上がつて礼拝を

していた。彼の母オンメ・アリーが、家の中で、完全なる神に意識を向け座っていた。突如、カドルの夜の光が、彼女に顕れた。彼女は叫んだ。「モハンマドよ！我が息子よ！お前がそこで求めているものはここにある。」導師は下りて来てその光を目にし、母の足下に跪いた」⁸⁵

5 ヴアハティイーエ・オンメ・ファズル *al-Yahatiya Umm al-Fazl*

ヴァハティイーエ・オンメ・ファズルは、この時代の偉大な女性スーフイーのひとりであり、「（真理を表す）舌」*lingua*と「知識」*gnosis*と「心的境地」*gnosis*において、同時代に無二の存在とされた。彼女は、同時代の多くの導師らと深交を結んでいた。ニーシャープールに暮らしていた時期には、アブー・アムル・ビン・ノジャイドや、アボル・ガーセム・ナスラーバディ、アブー・サフル・ムハンマド・ビン・スライマーンなどのスーフイー、および、アボル・ガーセム・ラーズイーやモハンマド・ビン・ファッラー「ニーシャープールの神秘家、ハディース伝達者」、そして、アブドゥウラー・ムアッリムなどのダルヴィーシュの導師、そして、他の多くのスーフイーが、彼女の説教集会に参席していた。『タサウフ』の意味と神への愛（マハッバ）についての彼女の言葉は、神秘主義に関する彼女の深い認識の証である。彼女は、タサウフとは、この世のあらゆるものを意識から遠ざけ、それらへの執着を断つことであると捉えていた。また、神への愛について、次のように述べている。

「私〔著者スラミー〕は彼女がこう言うのを聞いた『神への愛の真理

ḥaqīqat al-mahabbah とは、愛するお方 mahbūb 以外には沈黙し、彼の言葉を聴く以外は耳を閉ざすことである⁸⁶』

また、彼女は言った。『容易に汝を惹きつけるものに用心せよ。汝を知識 *ilm* を探求しているのだという幻想の中にとらえるものに用心せよ。知識を探求する者 *ṭalīb* は、知識に従って実践しなければならぬ。知識による実践 *ʿamal* とは、断食と喜捨と礼拝の多さではない。それは、神への献身の純粹さ *ikhlas* であり、意思の真正さであり、至高なる神のご意思に意識を向けることである』⁸⁶

結び

以上、様々なスーフィー列伝および、あるいは、神秘主義文献、歴史史料に見られる逸話や記述から、イスラーム最初の四世紀の神秘主義の歴史における女性たちの足跡を見てきた。名の知られた、あるいは、無名の女たちに関する逸話や記述が残されており、それは、生涯の大半が伝説に彩られているラービア・アダヴィーアから、在住した地と若干の言葉が記憶にとどめられるのみの女性まで、実に様々である。

神秘主義文献における〈女〉についての記述

スーフィーらは、スーフィー列伝やその他の記述において、女たちの名を記さないのが常であった。もし、導師らが女が語った言葉を用い、その言葉が優れた表現として記述される場合にも、ただ、「ある女から聞いた」と記すにとどまっていた。また、ラービアも、象徴的な存在

として名を挙げられるのであり、神秘主義における女性の存在という問題を彼女の名を挙げることによって、それも、実在の人物というよりも伝説の人物として記すことで問題を避け、その他の女たちの名には触れずにいたのである。

たとえば、カラーバーズイーは、これら女性スーフィーたちと同時代にホーラーサーンに生き、最も古い神秘主義文献のひとつである『神秘主義の徒の教義に関する記述』*al-Taʿaruf fi mahabbat Ahl Tasawwuf* を著したが、女たちの名や評伝については一切言及していない。注目すべきは、カラーバーズイーが、最も普遍的な神秘主義の定義をあるひとりの女性スーフィーの存在を認識しており、また、彼女らの神秘体験を信頼していたことを示している。ハージェ・アブドゥッラー・アンサーリーは、スラミーが『スーフィーの階層的分類』を執筆したのち、ほどなくして、これをペルシア語に翻訳している。しかし、スラミーが記述した『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』に関しては、全く言及していない。神秘主義の歴史において大半を占めているのが、このようなスーフィーである。

バーヤズィード・バスターミー、スラミーと女性スーフィー伝

しかし、その一方で、スーフィー列伝において女たちの名を記し、のみならず、女の言葉や教えを自身の精神的変遷に大きな影響を及ぼしたと認める者もいた。彼らの生涯を見ると、その生育環境、および、家族環境において女が受けていた尊敬や信頼、女がもっていた力が、女に対する肯定的な視点に結びつき、歴史や伝記記述において女

の小伝を記すことへの責任感につながったと思われる。このようなスーフィーの典型が、『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』の著者、アブー・アブドゥッラー・スラミーと、バーヤズィード・バスターミーである。彼らの生涯においては、母親の存在が女の価値と地位を認識させたのであり、女の存在に対する敬意を幼少期、少年期に形成させたのである。

スラミーは、若くして父を亡くし、母方の祖母のもとで教育を受け、祖父の経済的援助を受けながら学問を修得した。また、母の恩恵によって、ニーシャールでも有数の一門の一人息子であるにもかかわらず、神秘道の求道に邁進できたのである。さらに、彼は母の一門の名を自分の名として選んでいる。⁸⁸ 『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』は、女性スーフィーのみを収めた伝記集成としては、唯一のものである。

『スーフィーの階層的分類』をペルシア語に翻訳したハージェ・アブドゥッラー・アンサーリーは、スラミーが著した女性スーフィー列伝については全く触れていない。しかし、スラミーの五世紀のち、ジャーミーがスーフィーの伝記集成『親交の息吹』を著した際には、評伝の記述にあたって、スラミーの『スーフィーの階層的分類』とアンサーリーのペルシア語訳を用いているのに加え、女の存在を切り捨てることなく、『親交の息吹』の一部を女性スーフィーの記述に充てている。

バーヤズィードの生涯に関する逸話にも、女たちの関わりが記されている。神秘道の求道のさまざまな段階において、彼は女たちから影響を受けているのである。バーヤズィードは、まず、ひとりの女（彼の母親）の恩寵によって神秘道における求道を始めた。さらに、若年

期には、神に仕えるべきか、母に仕えるべきかで逡巡し、母にこう言った。

「ぼくは二軒の家をまかされてどうしたら良いのか不安になったのです。：あなたのために仕えるようにするか、それとも、ぼくを神に委ねて、すべて神のために尽くすようにするか、どうすればよいのでしょうか」

母親は言った。

「私はあなたを神に仕えるようにしたので。あなた自身があなたの手を選ぼうにしたはずですよ」⁸⁹（藤井訳『聖者列伝』一五四頁）

バーヤズィードの母は、彼が母に仕えるのではなく、神に仕えることを許したのである。また、のちには、女性説教師や、女たちの言葉が彼に驚くべき影響を与えており、「霊知者たちの王」呼ばれたときにも、一人の女を、「我が老師」と呼んだほどである。この女はバーヤズィードに対し、彼の自我がもつ虚栄心に気付かせるとともに、人間が、「神への熱望と神の唯一性の前に圧倒され」ているときにさえ、我執の害悪から護られてはおらず、世人の歓心を買おうとする気持ちがひそんでいることを教えたのである。

伝えられるところでは、バーヤズィードは、「あなたの師は誰だったのか」と問われて次のように答えたという。

「それは一人の老女だ。

ある日、私は、神への熱望と神の唯一性の前に圧倒され、髪の毛一本の入る余地のない密度の高い陶酔の境地にいたのであった。私

は、忘我の恍惚のままに荒野に向かった。すると、小麦の皮袋を持った老女が一人こちらに向かつてやって来て、私に言った。

「私のこの袋を運んで下され」

私自身はそうすることができない状態であった——私は合図をして一頭の獅子を呼びだした。獅子がやってきたので私は袋をその背に乗せた。そして、老女に向かつてこう言った。

「町に行つて誰に会つたかを言うのかね」

というのも、私は、私が何者であるかを知られなくなつたのだ。

老女は言った。

「二人の自惚れの強い圧制者に会つた、とね」

私は尋ねた。

「一体何を言っているのだね」

老女は答えた。

「この獅子は神様に義務を命じられているのか、ええ、どうだい」

「いいや」

「あなたは、栄光ある神が責務を定めてもらつしやらないものを勝手に義務づけたじゃないか。これは暴挙というものじゃないかね。——私は、その通りだと領いた——それなのに、町の住民に、

神がおまえさんに従順で、あんたが奇蹟の持ち主であると知つてほしいとくる。これは高慢というものじゃないかね」

私は、その通りだと言つて回心し、考えられる最も高い地点から、底なしの下劣なる地点へと下降したのだつた。これが、我が老師の言葉であつた」⁹⁰ (藤井訳『聖者列伝』一七九—一八〇頁)

神秘主義の第一期において、女たちによる教えが自らの神秘修行に影響を及ぼしたと認める導師として、ソフィヤーン・サウリーとズン・ヌーン・ミスリーの名を挙げる事ができる。また、第二期としては、アブー・アムル・ビン・ノジャイド、ハムドゥーン・ガツサル、アブー・ハフス・ネイシャープリー、アブー・オスマーン・ヒーリー、アポルガーセム・ナスラーバーディーのようなホラーサーンの非難の徒(マラーマティーヤ)の導師たちは、女たちとも深交をもち、彼女らの言葉を引用している。

女性スーフイー伝と記述対象

神秘家の一門に縁のある女たちは、その父の名、あるいは、兄弟、夫の名ゆえに、より詳細な記述がなされている。しかし、神秘家の一門と関わりのない女たちは、ときに、教行の言及のみにとどまり、あるいは、名のみが記される。アフマド・ハズラヴィーイェの妻オンメ・アリーなど、神秘道導師らと縁のある女たちの言葉や生涯についての記述は、いかに簡略に記されているとはいえ、他の女たちに関する記述よりも詳しいものである。

たとえば、ファーテメーイェ・バルデーイェ Fatima al-Bardaiya は、アルダピールの出自で、靈知者にして説教師、醉言を口にする者 *shaykh* であり、導師らは疑問があると彼女に尋ねるほどの学問的地位に達していたが⁹¹、彼女については「女性神秘主義敬虔家たち」[「および、『親交の息吹』」の中に教行の記述が残されているのみである。また、ヘジュラ暦三世紀「西暦九世紀」のスーフイーであるサリーイェ・サカティーの弟子のひとりであつた女についても「親交の息吹」に簡

略に記されているが、彼女については、名前すら残されていない。ジュナイド・バグダーディー (910没) 「ネハーヴァンドに生まれ、バグダードで暮らした神秘哲学者」は、こう伝えている。「この女のように宗教的義務を良く行うのであれば、彼女が予知せぬことなど、その身に起こりはしないであろう。」さらに、アブー・サイド・アビル・ヘイル (1049没) 「ホラーサーンの高名な神秘道導師」は、神秘体験において神との合一の境地に達していたマルヴの女について、こう伝えている。「彼女は言った『人々は、我らを一時なりとも放し給うなど (神に) 祈っている。しかし、私は三十年に渡ってこう祈ってきたのだ。一瞬でもいい、我を放し給え、私が何者であるのか、私は我であるのかを確かめるために、と。しかし、まだ一度もそのように神が私を放し給うたことはないのだ』」⁹²

スーフイー列伝に記述されている女たちを、おおよそ二つに分類することができる。ひとつは、名と評伝が記されている者たちであり、彼女らは大半がスーフイー一門の女で、神秘道の環境の中で育っている。もうひとつは、敬虔主義 *parhizgari* の女たちであり、その禁欲主義 (ズフド) ゆえに、他の神秘家の驚嘆の的となり、あるいは、イバードと信仰の実践とが他の者の手本となった者たちである。彼女らは、たいていが無名であり、伝記執筆者は旅の道中でこうした女たちに遭遇し、「敬虔な女」、「荒野の女」、「カアバの女」などと記している。たとえば、『純粹の資質』には、二百四十人の禁欲主義者や法学者、女性スーフイーについて、小伝や言葉が記されているが、その大半は、名や出自が記述されていない。

また、スーフイーとなった女の中には、王族や名家の出自である者

もいる。たとえば、オンメ・アリーは、王子であったイブラーヒム・アドハムと同様、王女であったが、その地位を捨てて改悛 (タウバ) し、神秘道に入信した。また、ラーベエイエ・ペンテ・イスマイル [原注51参照]、ゴライシイエイエ・ナサヴィイエ [2 (15) 参照]、アフマド・ピン・ハーニー・ニーシャープリーの娘ファアテメ [2 (7)]、アーイエシエイエ・マルヴズイエ [2 (8)] などの女性スーフイーらは、名家の出身であり、自身の富を神秘道やフトウワのために捧げた。さらに、ファアテメ・ペンテ・エムラーン [3 (3)]、アブドゥーセ・ペンテ・ハーレス [3 (3)]、アーマネイエ・マルジーイエ *Amāna al-Mariya* ([*Dhikr al-Niswal*, p.122])、ファアテメイエ・ハーネガーヒーイエ *Fātima al-Khāngahya* ([*Dhikr al-Niswal*, p.123]) などは、生涯を神秘道修道所やスーフイーたち、フトウワの徒らのために捧げている。

なお、伝承の中には、シャアヴァーネやラーピアなどのスーフイーが、楽師の境遇に落ちたと伝えているものもある。しかし、これらの記述には、現世での執着や悦楽に耽ったことが、神秘道へと目を開かせ、神秘修行に入る端緒となったはずだという考えが関与している。イブラーヒム・アドハムについても、彼が現世に執着していた時期の出来事が彼の求道の端緒となったと述べられ、また、のちの神秘主義の歴史においては、サナーイーやアッターラの高名なスーフイーの生涯に関しても、現世に囚われていた時期と神秘道に目覚めてのちの時期という二つの時期から成る逸話が形成されたのである。

女性スーフイーの置かれた位置

女性スーフイーに関する記述を概観すると、彼女たちの置かれてい

た社会の状況について知ることができ。たとえば、ゴライシイエ・ナサヴィエ・ナサヴィエ^{〔2〕}の参照の小伝からは、ニーシャープールでは、女たちが神秘道の説教や集会に参席することが可能であったことが窺い知れる。女性スーフイーは、神秘道の道の道に足を踏み入れることにより、女たちに枷された社会的な法の拘束から踏み出すことができたのである。それは、普通の女には得られるものではなかった。おそらく彼女らの神秘道における精神的地位が、性を越えた価値を彼女たちに与えたがために、ときには旅をし、男性スーフイーの集会に参席し、彼らと深交を結び、議論をし、教義を教授し、自らの神秘体験について語ることができたのであろう。

イスラームの三世紀、四世紀「西暦九世紀、十世紀」のホラーサーンにおける女性スーフイーの存在は議論に値するものである。このような時代は、神秘主義の歴史において二度と現れることはなかった。女性スーフイーにとって神秘道の教えを受ける機会が、男性よりも限られていたにも拘わらず、ホラーサーンの女性スーフイーらは、神秘主義の説教集会に参席し、あるいは、集会で男性スーフイーらに教授したり、自らの富をスーフイーらのために投げ打った者もいたのである。

女性スーフイーたちは、互いに朋友として、あるいは、弟子と導師として深交をもった。例えば、アーイエシエ・マルヴズィーエ^{〔2〕}は、アムレ・イエ・ファルガーニーエ *Amra al-Faghāniya* の言葉伝えてい。アファド・ピン・ハーニー・ニーシャープールの娘ファアテメ^{〔2〕}は、アブー・オスマーン・ヒーリーの朋友であり、自分の財産を彼と彼の朋友たちのために遣った。⁹⁴ アマトッラー・ジャバリーエ^{〔2〕}とファアテメ・ネイシャープリー^{〔2〕}は、バー

ヤズィード・バスターミーの朋友であり、ゴライシイエ・ナサヴィエ^{〔2〕}は、オンメ・コルスーム^{〔2〕}やソライレ・シヤルギーエ^{〔2〕}、アズィーゼ・ヘラヴィーエ^{〔2〕}など、同時代の女性スーフイーについての伝承や、彼女たちの言葉を伝えている。これら多くの女たちは、同時代のスーフイーによって、その霊知と叡智を賞賛され、あるいは、同時代のスーフイーを霊知を讃える言葉を残している。

アブー・オスマーン・ヒーリーの孫、オンメ・アファド^{〔2〕}は言った。「知識^{〔2〕}は人間の命である。そして、実践 *amal* は術である。叡智 *bil* は装飾であり、霊知 *bilāh* は光であり、慧眼 *batina* である。」⁹⁵

また、スラミーは、アマトル・アズィーズ *Amat al-Aziz* についての記述の中でこう記している。あるとき、羊の衣を着た女——羊の衣を着用することは、女性スーフイーの間でも広まっていた——が訪ねてきた。アマトル・アズィーズは、彼女にこう言った。誰でも羊の衣をまとうに相応しいものであるわけではない。時代の人々のうち、最も清浄なる者、その性質において最も善き者、ふるまいにおいて最も高邁なる者、その本性において最も甘美なる者、…助けとなることにおいて最も惜しみなき者でない限りは。⁹⁶

おそらくイスラーム初期の時代において女たちがもっていた自由を、のちの時代に、真正な、あるいは、疑わしいハディースに従って定められた法で、徐々に限定していったのだろう。神秘主義は当初、女性をより広く受け入れていたが、のちの時代には減少していった。後世のスーフイー列伝や歴史書は、ハディース学やハーディースの伝達に精通した多くのムスリム女性の名を記している。しかし、その中でも

女性スーフイーの名は、僅かに記されるのみである。⁹⁷

訳者あとがき

本論考は、ザフラー・ターヘリー氏が、イランの文芸誌に寄稿したペルシア語論文「女性神秘家たち」(“Zanān-e Sūfi”)を改稿、翻訳したものである。ペルシア文学とジェンダー論を専門とするターヘリー氏が本稿を著した直接の契機は、一九九一年にサウジアラビアのリヤド大学図書館で発見されたアラビア語史料『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』*Dihkr al-Niswa al-Mura'abbiyat al-Sūfiyat*の存在であった。同史料は、西暦八世紀から十世紀のバスラやシリア、ホラーサーン地域における女性スーフイー八〇人(訳注1)の伝記集成である。執筆者のアブー・アブドゥッラフマーン・スラミー(937-1021)は、ホラーサーンで発展した古典期スーフイズムを代表する人物であり、スーフイー(神秘主義者、神秘家)一〇三人の列伝である『スーフイーの階層的分類』*Tabaqāt al-Sūfiya*や、スーフイーによるクルアーン注釈書『タフスィールの真理』*Haqīqeq al-Tafsīr*で知られる。

新史料『女性神秘主義敬虔家たちの記述』は、一九九三年にマフムド・ムハンマド・アッタナーヒーにより、カイロで校訂・出版された。さらに、一九九九年には、コーネルが、再校訂したアラビア語テキストに英訳と詳細な序文(論考)を付して刊行している(Cornell, R.E., *Early Sufi Women*, Louisville, KY, 1999)。ターヘリー氏は、まず、同史料の成立について「ジャミー(1414-92)の『神聖なるお方の親交の息吹』*Nafahat al-'Uns min Hadīrat al-Quds*に見られる記述に基づき、上記二人の校訂者とは異なる見解を提起する(本稿「はじめに」参照)。さらに、コーネ

ルが同史料中に収められた女性スーフイーのうち、バスラとシリアのスーフイーのみを取り上げ、ホラーサーンのスーフイーについてはほとんど論じていないことを批判する。

本稿は、新史料の記述に基づきながら、他の代表的なスーフイー列伝であるスラミーの『スーフイーの階層的分類』や、アッタル(1221or29/30没)の『イスラーム神秘主義聖者列伝』*Tadhkirat al-Awliyā'*、ジャミーの『神聖なるお方の親交の息吹』、イブン・ジャウズイー(1116-1201)の『純粋の資質』*Ṣifat al-Sāwīya*などに散見される女性スーフイー伝承にも改めて光をあてることによって、まず、バスラを中心とした(禁欲主義神秘家(スーフイー)の女性たちに触れ、次に、イスラーム神秘主義の「イラン的」側面とも言えるホラーサーン派神秘主義の女性史を新たに提示する。史料中の記述からは、神秘主義における女たちの位置が、男性スーフイーらとの邂逅や対話を通して浮かび上がる。そこには、神秘道の門戸を女たちに対して開くことへの当時のスーフイーらの反発や嫌悪が描かれる一方で、神秘道における女の存在に対して比較的寛容な、スーフイズム古典期におけるホラーサーンの精神風土が示唆される。

『女性神秘主義敬虔家たちの記述』はアラビア語史料であるが、ホラーサーンを中心とした神秘主義を描き出そうとする原著者の意図と希望を汲み、同史料に挙げられたの女性スーフイーの名は、全てペルシア語原音に従ってカタカナ表記し、アラビア語原音をローマ字転写して付した。(なお、「ラービア・アダヴィーア」のみ、アラビア語原音そのまま用いている。また、これ以外の人名・用語の表記と転写においては、必ずしも、アラビア語原音・ペルシア語原音の表記を統一していない。)

ターヘリー氏によれば、現在のイランにおけるイスラーム神秘主義

研究においても、女性神秘家の存在はほとんど論じられることがないという。本論者が、「イスラームと女性」という極めて現代的な関心に応えようとするものである点にも注目されたい。

訳者注

- 1 『女性神秘主義敬虔家たち』は、八四人の女性スーフイーの名に基づく八四章から成るが、一人の人物が二つの名で記されている事例等が確認されるため、これらを整理すると八十人の伝記集成であると言える。(Cornell, R.E., *Early Sufi Women*, Louisville, KY, 1999, p.47)
- 2 ラービアのカーバ神殿〈軽視〉については、次のような逸話がある。「伝えられるところでは、別の機会にメッカに行った時、彼女は砂漠の真中に、彼女を迎えにやって来るカーバ神殿を見たという。ラービアはこう言った。
「私には館の主こそ必要なのにカーバをどうすれば良いのですか。カーバ神殿に従うことなどできません。カーバの美しさにどんな喜びがあるのでしょうか。私には、掌の分だけ我に近づく者は、誰も、前腕の分だけ彼に近づこう。」「ハディース」という出迎えこそが必要なのに、カーバを一体どうしろというのでしょうか。」(藤井訳『聖者列伝』五七頁)
- 3 井筒俊彦(訳)『コーラン』(中)、岩波文庫、一九五八、二七二頁。
- 4 前掲書、(下)、一二六頁。
- 5 神秘主義における「弊衣」*khalqa/khalqe*については、佐々木あや乃『弊衣』とハーフェズとその社会批判の精神を探究する『総合文化研究』(東京外国語大学総合文化研究所)第七号、二〇〇三、一五六―一七五頁。

6 シーラーズで暮らしたオンメ・モハンマドについては、『女性神秘主義敬虔家たち』には記述がなされていない。

原著者注

* 主要文献略記

- ‘Attār, Farīd al-dīn, *Tadhkirāt al-Awliyā’*, rev. by Mohammad Qazvīnī, 5th print, Tehrān, 1336 (H.S.H.): [‘Tadhkirāt al-Awliyā’]
- Ibn al-Jawzī, *Abū al-Faraj, Sifat al-Safwa*, vol.4, Heydar ābād dakan, 1356 (H.O.): [‘Sifat al-Safwa’]
- Jāmī, ‘Abd al-Rahmān, *Nafahāt al-‘Uns min Haqrāt al-Quds*, rev. by Mehdi Touhīdīpur, Tehrān, 1337 (H.S.H.): [‘Nafahāt al-‘Uns’]
- al-Sulamī, *abū ‘Abd al-Rahmān, Tabagāt al-Šūfyā*, rev. by Nūr al-dīn Shuraybā, 3rd print, al-Qāhira, 1318 (H.O.): [‘Tabagāt al-Šūfyā’]
- , *Dhikr al-Niswa al-Murābbidāt al-Šūfyāt*, rev. by Mahmūd Muḥammad al-Tanāhī, al-Qāhira, 1993: [‘Dhikr al-Niswa’]
- 1 [‘Dhikr al-Niswa’], p.61, [‘Sifat al-Safwa’], p.101, [‘Nafahāt al-‘Uns’], p.620
 - 2 Stowasser, Barbara, F., *Women in the Qur’an, Traditions and Interpretation*, New York, Oxford, 1994, pp.13-24
 - 3 Nashat, Guity, “Women in pre-Islamic and Early Islam Iran”, *Women in Iran from the Rise of Islam to 1800*, ed., Guity Nashat, Lois Beck, University of Illinois, 2003, pp.37-38, p.41
 - 4 一九九九年、コーネル女史は、同文献のアラビア語テキストを、英訳とともに刊行した(Cornell, R.E., *Early Sufi Women*, Louisville, KY, 1999)。彼女は、同書の序において、スラミーと彼の著作、および、彼の時代のイスラーム思想諸学派について詳細に論じているが、女性スーフイー

の分類に関しては、バスラとシリアの禁欲主義の流れにのみ注目しており、スラミーが多く挙げているホラーサン派の女性スーフイーについては、簡略な言及のみにとどめている。また、コーネルは、ハーシェ・アブドゥウツラー・アンサーリー (1005/6-1088/9) がペルシア語に訳した『スーフイーの階層的分類』の末部は、『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』から訳されたものであると解している。さらに、『ジャーミーについても、彼が生まれ、暮らした地はジャームであることも関わらず、アフガニスタンのスーフイーであるとみなしている。(Cornell, op.cit., p.22,23)

- 5 [Nafahāt al-'Uns], p.615
- 6 al-Sam'ānī, Abū Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad, *al-Taḥbīr fī Mu'jam al-Kabrī*, with note by Khalīl al-Manṣūr, Bayrūtū, 1418 (H.O)/1997, pp.227-257
- 7 Zarrīnkūb, 'Abd al-Ḥoseyn, *Jostyū dar Taṣawwof-e Irān*, Tehrān, 1357 (H.SH.), moqaddame-p.2
- 8 この問題については、次の文献を参照のこと。
Zarrīnkūb, 'Abd al-Ḥoseyn, *Arzesh-e Mirāse-Šūfiye*, Tehrān, 1353(H.SH.), faṣṭ-e awal, Nicholson R.A., *Taṣawwof-e Eslāmī va Rābe'e-ye Ensān va khodā*, translated by Moḥammad Rezā Shaftī-Kadkanī, Tehrān, 1374 (H.SH.), p.27,30
- 9 Maqdasī, Muṭahhar b. Tāhir, *Āfarīnesh va Tārīkh (vol.4-6)*, translated by Moḥammad Rezā Shaftī-Kadkanī, Tehrān, 1374 (H.SH.), pp.831-832
- 10 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e awal, p.12
- 11 Zarrīnkūb, op.cit., p.45
- 12 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e awal, p.39
- 13 *Ibid.*, p.40
- 14 *Ibid.*, pp.62-65
- 15 *Ibid.*, p.258

- 16 *Ibid.*, p.67
- 17 *Ibid.*, p.72
- 18 Hujwiri, 'Alī b. 'Uḥmān, *Kashf al-Mahjūb*, rev. by V. Zhukovski, Tehrān, 1371(H.SH), pp.257-460
- 19 [Dhikr al-Niswal, p.61, [Nafahāt al-'Uns], p.622
- 20 [Tadhkirāt al-Awliyā'], p.258
- 21 [Dhikr al-Niswal, p.35, [Sifat al-Ṣafwa], pp.13-15
- 22 [Dhikr al-Niswal, p.36, [Sifat al-Ṣafwa], pp.15-16
- 23 [Dhikr al-Niswal, p.51, [Sifat al-Ṣafwa], pp.16
- 24 [Dhikr al-Niswal, p.57, [Sifat al-Ṣafwa], pp.22-23
- 25 [Sifat al-Ṣafwa], p.21
- 26 *Ibid.*, p.30
- 27 [Dhikr al-Niswal, p.66, [Sifat al-Ṣafwa], p.26
- 28 Choksy, Jamsheed, "Women During the Translation from Sasanian to Early Islamic Times", *Women in Iran from the Rise of Islam to 1800*, ed., Guity Nashat, Lois Beck, University of Illinois, 2003, pp.54-55
- 29 Cornell, op.cit., p.47
- 30 Šafā, Zabīh allāh, *Tārīkh-e Adabiyāt dar Irān*, Tehrān, 1371(H.SH.), vol.1, p.18
- 31 スラミーは「ジャーミーがラービアの評伝を『親交の息吹』の中で記しており、彼女を〈az 'ajam〉「非アラブ人（多くペルシア人を指す）」の出自の」とみなしていたと書いている。また、「イブン・ジャウズイーは、彼女がペルシア語で話していた」とに言及している。にも関わらず、『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』を最初に校訂した「マフムード・アッタナーヒー、および、コーネルは、いずれも、同文献中の「非アラブの女性」「ajamiya の語を、「奇妙な（女性）」「ajbatu と読み違えており、さらに、「コーネルはこれを Remarkable person と訳している。」

- (Cornell, op.cit., p.107, [Nafahāt al-'Uns], p.617, [Sifat al-Şafwa], pp.36-39)
- 32 Nashat, op.cit., p.27
- 33 [Dhikr al-Niswal], p.44
- 34 Nurbakhsh, Javād, *Zamān-e Şūfi, Tehrān*, 1379 (H.SH.), p.133
- 35 [Dhikr al-Niswal], p.44, [Nafahāt al-'Uns], p.167
- 36 Nicholson R.A., (tr.) *Shaftī-Kadkanī*, op.cit., p.33
- 37 Badawī, 'Abd al-Rahman, *Shahīd-e 'Esḥq-e Elāhi, Rab'e-e-ye Adaviye*, translated by Mohammad Tahiri, Tehrān, 1367 (H.SH.), p.75
- 38 [Sifat al-Şafwa], p.39
- 39 Purnāndariyān, Taqī, *Digdar ba Simorgh*, Tehrān, 1382 (H.SH.), pp.18-21
- 40 [Tadhkirāt al-Awliyā'], (bakhsh-e avval), p.442
- 41 Nicholson R.A., (tr.) *Shaftī-Kadkanī*, op.cit., p.144
- 42 〈Qe'dts-bānū〉 (聖女) の語彙 シヤフイーニー = イェ・キャドニ・キャニー
شاهدنامه
- 43 Zarrīnkūb, op.cit., p.51
- 44 [Dhikr al-Niswal], pp.27-31
- 45 Cornell, op.cit., p.60
- 46 Badawī, op.cit., p.9
- 47 Ibid., p.5, [Sifat al-Şafwa], p.277
- 48 Nurbakhsh, op.cit., p.25
- 49 Badawī, op.cit., p.47
- 50 Ibid., pp.20-21
- 51 Purnāndariyān, op.cit., pp.31-33
- 52 ラービアの生涯に関する逸話は、モアーゼーイェ・アダヴィイーエや、
ラーヘエ・ベンテ・イスマイーール Rabī'a bint Ismā'īl (アフマド・ピ
ン・アピル・ハヴァーリーの妻) [[Dhikr al-Niswal], pp.59-60 に記載] に
- 53 このこの逸話と混じり合っている。例えば、ラービマ・マダヴィーア
が埋葬されたのは、バヌラであることが知られるが、エルサレムと書か
れている文献もある。しかし、エルサレムに埋葬されたのは、ラーヘエ・
ベンテ・イスマイーールである。Badawī, op.cit., p.52, pp.52-55, p.58, 59
- 54 Purnāndariyān, op.cit., p.27
- 55 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e dovom, p.76
- 56 [Dhikr al-Niswal], p.29, [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e avval, p.71
- 57 Zarrīnkūb, 'Abd al-Hoseyn, *Josyū dar Tasawwof-e Irān*, Tehrān, 1357(H.
SH.), pp.353-397, Zarrīnkūb, 'Abd al-Hoseyn, *Arzesh-e Mirāse- Şūfiye*, Tehrān,
1353(H.SH.), pp.169-171, Dehkhodā, 'Ali Akbar, *Loġhatname*, vol.11, Tehrān,
1377(H.SH.), p.16974
- 58 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e avval, p.257
- 59 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e dovom, pp.257-258
- 60 [Tadhkirāt al-Awliyā'], bakhsh-e avval, pp.136-141
- 61 [Dhikr al-Niswal], p.76, [Nafahāt al-'Uns], p.622
- 62 Zarrīnkūb, 'Abd al-Hoseyn, *Josyū dar Tasawwof-e Irān*, Tehrān, 1357 (H.SH.),
p.40
- 63 [Dhikr al-Niswal], pp.76-77, [Nafahāt al-'Uns], p.622
- 64 [Dhikr al-Niswal], pp.61-63, [c], p.101, [Nafahāt al-'Uns], pp.620-621
- 65 [Dhikr al-Niswal], pp.96-97
- 66 Ibid., p.95
- 67 Ibid., pp.80-81
- 68 Ibid., p.90
- 69 Ibid., p.91
- 70 Ibid., p.124
- 71 Ibid., p.92

- 70 Ibid., p.85
- 71 Ibid., p.102
- 72 Ibid., p.113
- 73 Ibid., p.114
- 74 Ibid., p.115
- 75 彼女の兄弟ムハンマド・ビン・アブドゥッラー・ハムシャーズは、998/9年に没した。『女性神秘主義敬虔家たちについての記述』の校訂者]アッタナーヒーによれば、彼は、シャフイーイー学派の法学者で説教師であった。[なお、引用は『Dhikr al-Niswal』, p.116]
- 76 Ibid., p.117
- 77 Ibid., p.119
- 78 [Tabaqat al-Sufiyah], pp.482-488
- 79 [Dhikr al-Niswal], p.105, pp.119-120
- 80 Ibid., p.110
- 81 Ibid., pp.111-112
- 82 Zarrinkub, 'Abd al-Hoseyn, *Josyū dar Tasawwof-e Iran*, Tehrān, 1357 (H.SH.), pp.208-213
- 83 Ibn al-Jawzī, Abū al-Faraj, *Tibās Ibtis*, rev. by 'Ayman Šālih, Dār al-Ḥadīth al-Qāhira, 1415(H.Q.), p.382, Zarrinkub, op.cit., p.213
- 84 [Tabaqat al-Sufiyah], p.262, [Nafahat al-'Uns], p.235
- 85 [Nafahat al-'Uns], p.623
- 86 [Dhikr al-Niswal], pp.106-107
- 87 Kalabadi, Abū Bakr Muhammad, *al-Ta'arruf fi madhhab Ahl Tasawwuf*, Bayrutu, 1980, pp.21-26
- コーネルは、この女性は、ファアテメ・イエ・ネイシャブリーで فهرست نامها (Cornell, op.cit., pp.12-17) しかし、この見解には実証性がない。何故なら、ズン・ヌーンは、ファアテメ・イエ・ネイシャブリーという言葉を伝える際に、彼女の名を明言するため、名前を挙げない言葉を用いるとは考えにくい。
- 88 [Tabaqat al-Sufiyah], pp.17-18
- 89 [Tadhkirat al-Awliya'], bakhsh-e avval, p.130
- 90 Ibid., p.144
- 91 [Dhikr al-Niswal], p.61, [Nafahat al-'Uns], p.621
- 92 [Nafahat al-'Uns], p.624, 629
- 93 [Dhikr al-Niswal], p.87
- 94 Ibid., p.91
- 95 Ibid., p.102
- 96 Ibid., p.104
- 97 Bulliet, Richard, *Women and the Urban Religious Elite in the Pre-Mongol Period, Women in Iran from the Rise of Islam to 1800*, ed., Guity Nashat, Lois Beck, University of Illinois, 2003, pp.68-79